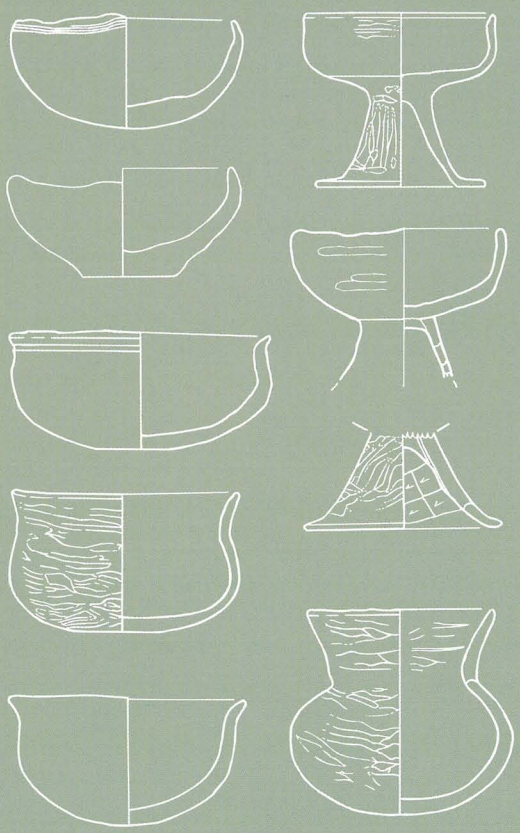
中山遺跡

平成23年箕輪中学校体育館改築事業に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書



2013年
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

序

箕輪町は伊那谷の北部にあり、豊かな自然に恵まれた、歴史と文化のある町です。先史の頃よりこの地の生み出す自然の恵みを求めて人々が暮らし始め、各時代を生きた先人達の努力によって今日の町の姿が築き上げられてきました。町内には、彼らが残した証である多くの遺跡が残されています。

今回調査対象となった中山遺跡は、松島区の中央部に位置し、天竜川右岸の段丘突端部に立地しています。現在遺跡が広がる一帯のほとんどは箕輪中学校の敷地となっています。昭和30年の町村合併で箕輪中学校が新築される前は農地として利用され、耕作時等に縄文土器が多く採取されたと伝えられています。

当該地では、校舎改築に伴い過去３回の調査が行われ、縄文時代及び平安時代の竪穴住居址を主体とする遺構と、それに伴う多くの遺物が出土し、それぞれの時代に集落形成がなされていた事がわかってきました。

今回、箕輪中学校の体育館が、老朽化により改築する事になり、これに伴い町教育委員会が工事に先行して発掘調査を実施しました。調査期間中には多くの方が見学に訪れ、遺跡の様子に触れていただいた事は大変喜ばしいことでした。調査の成果につきましては、本書の各章にて詳細に記してあります。本書を広く活用いただく事で、地域の歴史解明の一助となり、また、多方面の文化財保護に役立つ事を切に願うものであります。

最後になりましたが、今回の調査の実施にあたり、多大なるご理解とご協力をいただきました箕輪中学校の皆様をはじめ、調査にご協力いただきました建設関係者の皆様、ご指導いただきました先生方、そして暑い中を作業にご尽力いただきました調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

箕輪町教育委員会

例　　言

1　本書は、平成24年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,235番地１に所在する、中山遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の発掘調査及び整理作業等の記録保存業務は、平成23年度学校施設環境改善交付金を受け、箕輪町教育委員会が実施した。

3　本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行った。
遺物の洗浄・注記・接合－大串久子、小嶋清春、根橋とし子、宮下美鈴
遺物の実測・トレース・拓本－井澤はずき、大串久子、小嶋清春、根橋とし子、宮下美鈴
遺構図の整理・トレース・挿図作成・図版作成－井澤はずき
写真撮影－柴　秀毅、征矢　進、井澤はずき

4　本書の執筆・編集は、柴　秀毅、井澤はずきが行った。

5　調査現場の空中写真撮影は、有限会社Ｍ２クリエーションに委託した

6　基準点測量は岡田和宏氏に委託した。

7　出土遺物及び図面写真類と本書作成に関わる図版写真類は、すべて箕輪町教育委員会が管理し、箕輪町郷土博物館に保管している。

8　調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関にご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
㈱岡谷組／長野県教育委員会／㈶長野県埋蔵文化財センター／箕輪町立箕輪中学校／
市川隆之／小池　孝／櫻井秀雄／廣田和穂／柳澤　亮／綿田弘実（敬称略）

凡　　例

1　挿図

・挿図の縮尺は、各図の下部に表記（スケールを有するものも含む）した。

・遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、以下のものを表す。

－焼土　●－土器　　－石　　－炭化物集中

・土器実測図中のスクリーントーン表示は、以下のものを表す。

－須恵器断面　　－剥離部分

2　土器及び遺物観察

・土層及び土器の色調は、『新版　標準土色帖』を用いて記してある。

・出土土器観察表の法量の単位はセンチメートル（㎝）で、残存度はパーセントである。また、現存する数値は「(　)」、推測される数値は「〈　〉」計測不能は「－」で表している。

・出土土製器・石製品・石器観察表の重量の単位はグラム（ｇ）で表している。法量は、現存する数値は「(　)」で、計測不能は「－」で表している。

・出土遺物の番号は、土器はカッコなし、土製品は（　）、石器は○、石製品は〈　〉で区別している。

本　文　目　次

序
例言・凡例
本文目次
挿図目次・表目次

第１章　発掘調査の概要…… 1
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　調査概要と体制…… 2
　第３節　調査の経過…… 2

第２章　遺跡の環境…… 4
　第１節　地形と地質…… 4
　第２節　周辺の歴史的環境…… 5

第３章　調査結果…… 7
　第１節　調査方法…… 7
　第２節　土層堆積状況…… 9
　第３節　遺構と遺物…… 9
　　１　竪穴住居址…… 9
　　２　土坑・ピット…… 14
　　３　遺構外出土遺物…… 19

第４章　総括…… 26

参考・引用文献
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図
第２図　周辺遺跡分布図
第３図　調査区設定図
第４図　調査区遺構配置図（全体図）
第５図　土層断面図（１区）
第６図　１号竪穴住居址カマド実測図
第７図　１号竪穴住居址出土土器
　　・石器実測図
第８図　２号竪穴住居址実測図
第９図　２号竪穴住居址カマド実測図
　　・遺物出土状況
第10図　２号竪穴住居址出土土器実測図（１）
第11図　２号竪穴住居址出土土器実測図（２）
第12図　２号竪穴住居址出土土製品･石製品･石器実測図
第13図　土坑実測図
第14図　土坑・ピット実測図
第15図　土坑出土土器・土製品実測図
第16図　土坑出土石器実測図
第17図　遺構外出土土器・土製品実測図
第18図　遺構外出土土器・土製品・石器実測図
第19図　遺構外出土石器実測図（１）
第20図　遺構外出土石器実測図（２）
第21図　遺構外出土土器拓影図（１）
第22図　遺構外出土土器拓影図（２）

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表
第２表　ピット一覧表
第３表　土坑一覧表
第４表　出土土器観察表
第５表　出土石製品観察表
第６表　出土土製品観察表
第７表　出土石器観察表

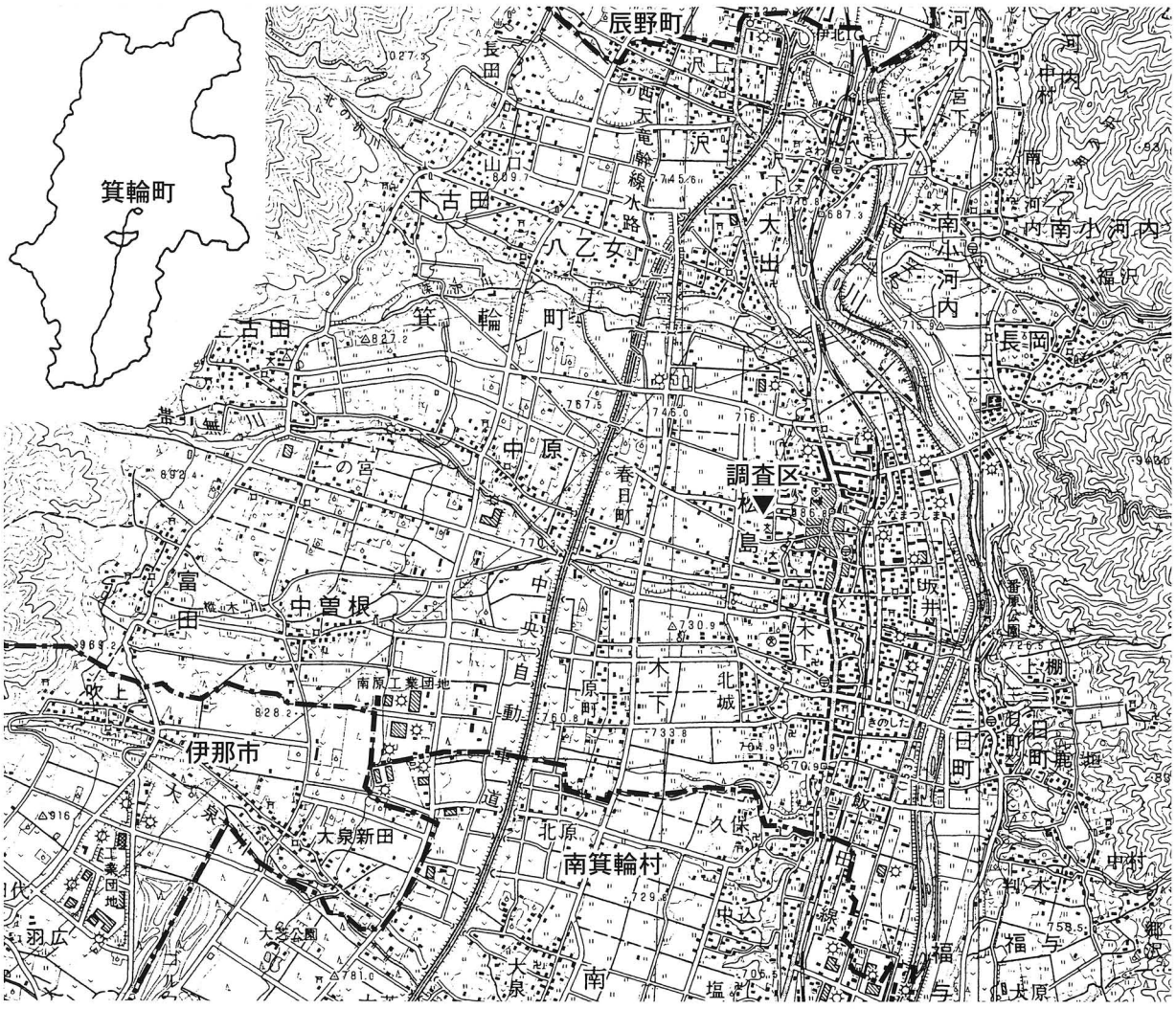
第１章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経過

中山遺跡は、箕輪町松島区に位置し、中央・南両アルプスの上昇に伴う地殻変動によって形成された段丘上に所在する。遺跡地からの展望も良く、西方に中央アルプス、天竜川をはさんで東方には南アルプスが展望できる。遺跡地は天竜川右岸より一段高い段丘突端に位置し、学校・宅地が立ち並び、田畑などの耕作地も点在している。

中山遺跡は箕輪町立箕輪中学校の増改築にあわせ、過去３回の発掘調査が行われ、縄文・平安時代を主体とした遺構・遺物が出土している。

今回、箕輪中学校の体育館老朽化による改築工事の計画が具体化し、平成23年10月に町教育委員会教育課より連絡を受け、用地が埋蔵文化財の包蔵地に当たり、過去の調査成果から用地内に遺構・遺物が残存する可能性が高いため、保護処置について教育課・中学校関係者と生涯学習課との間で協議を重ねた。その結果、体育館建設により文化財の破壊が余儀なくされる約800㎡を対象に、発掘調査による記録保存を行うこととなった。業務は町教育委員会（生涯学習課）が実施することになった。



第１図　調査地位置図（１：50,000）

第２節　調査概要と体制

１　遺　跡　名　　中山（なかやま）遺跡
２　所　在　地　　長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,251番地１他
３　事業期間　　平成24年８月21日～25年３月14日
４　事　務　局
　　教　育　長　　唐澤義雄
　　生涯学習課長　　唐澤清志
　　文化財係長　　柴　秀毅（箕輪町郷土博物館　学芸員）
　　文化財係　　有賀一治（　　〃　　）
　　臨時職員　　井澤はずき（　　〃　　）
５　調　査　団
　　調査団長　　唐澤義雄
　　調査副団長　　唐澤清志
　　調査担当者　　柴　秀毅、井澤はずき
　　調査団員　　有賀多恵子、伊藤輝彦、大串　進、小川陽三、唐澤栄治、川合佐一、木下正明、小嶋英樹、小林堅良、根橋とし子、堀川利平（※50音順）

第３節　調査の経過

８月21日(火)　既存体育館基礎除去箇所、及び隣接立木（モミ）伐採箇所の立会調査。南東の基礎外側付近でカマドを確認。
　22日(水)　現場調査で使用する道具等を準備。
　25日(土)　調査用重機（バックホー）を搬入。
８月27日(月)　重機にて表土剥ぎ（旧体育館基礎外側〔東側〕を１区とする）。
　28日(火)　重機にて表土剥ぎ（旧体育館基礎内側〔西側〕を２区とする）。並行して１区の上面確認作業を実施。２区で２号住居址（２Ｊ）を確認。１区の検出作業では土偶の破片が出土。１区のカマドを１号住居址（１Ｊ）とする。
　29日(水)　重機にて表土剥ぎ（２区）。１区及び２区の上面確認作業。
　30日(木)　１・２区上面確認作業。１区ではサブトレンチを入れて調査。遺物多数出土。
　31日(金)　１・２区上面確認作業。１区の遺物が多く出土する箇所を仮３号住居址（仮３Ｊ）として掘り下げ。土坑１～３掘り下げ、写真撮影。
９月３日(月)　１Ｊ（カマド）写真撮影、土層断面測量。土坑１～３測量。２Ｊ・仮３Ｊ掘り下げ。
　４日(火)　土坑４～８掘り下げ、写真撮影、測量。２Ｊ・仮３Ｊ掘り下げ。
　５日(水)　２Ｊ掘り下げ、測量。仮３Ｊ掘り下げ。土坑４完掘。
　６日(木)　雨天のため作業中止。箕輪中学校より見学の依頼あり。
　７日(金)　２Ｊ・仮３Ｊ掘り下げ。土坑１・８完掘。箕輪中学校１年４組見学、発掘体験。
　10日(月)　土坑９～11、ピット１・２掘り下げ。２Ｊ掘り下げ、測量。調査区基準点設置（現場作業）。

11日(火)　土坑９～11、ピット１・２写真撮影、測量。１Ｊ（カマド）平面測量。

12日(水)　２Ｊ・仮３Ｊ掘り下げ。土坑・ピットの掘り下げ、写真撮影、測量。

13日(木)　２Ｊ・仮３Ｊ掘り下げ。２Ｊカマド断面写真。仮３Ｊは遺構でないと判断（包含層）。

14日(金)　調査区西側土坑群の遺構測量。２Ｊ平面測量。土坑12～17掘り下げ。箕輪町議会議員が現場を視察。

18日(火)　土坑12～17写真撮影、測量。伊那ケーブルテレビ（みのわもみじチャンネル）取材。

19日(水)　雨天のため発掘作業は中止。午前中は現場の排水作業を行う。本日予定されていた箕輪中学校１学年の見学は延期。

20日(木)　土坑・ピットの掘り下げ、写真撮影。箕輪中学校１年１・３・５・６・７・８組が現場見学。

21日(金)　土坑・ピットの掘り下げ、写真撮影、測量等。

24日(月)　２Ｊカマド測量。土坑・ピットの掘り下げ、写真撮影、測量等。

25日(火)　２Ｊ遺物及び炭化材の平面測量。土坑・ピットの掘り下げ、写真撮影、測量等。

26日(水)　２Ｊ遺物及び炭化材の平面測量。土坑・ピットの掘り下げ、写真撮影。午前11時からラジコンヘリによる空中写真撮影（現場作業）。

27日(木)　土坑21・22写真撮影、測量。全体測量。箕輪中学校１年２組見学。

28日(金)　遺構の掘り下げ、写真撮影、測量。箕輪町教育委員会が現地視察。道具の片付け。

10月２日(火)　重機による埋め戻し。

３日(水)　重機による埋め戻し。

４日(木)　重機の搬出。現場での調査終了。

第２章　遺跡の環境

第１節　地形と地質

箕輪町は、東は南アルプス、西は中央アルプスにはさまれた、南北70㎞にも及ぶ伊那盆地の北部に位置する。また諏訪湖を源とし、盆地の中央低地帯を南に流れる天竜川によって、町はほぼ東西に二分された形となっている。盆地は、天竜川の低地から両アルプスの山頂に至って、大起伏地帯となっており、その景観から「伊那谷」と呼ばれる。

伊那谷は本州内陸部の中でも多くの活断層が分布し、約10㎞幅にそれが集中する、極めて活動的な構造盆地であることがわかっている。この地形は、第四期の地殻変動によって造り上げられた。

箕輪町を含む上伊那北部の竜西（天竜川西側の略称で、東側は「竜東」と呼ぶ）地域では、天竜川の各支流から押し出された土石流が重なり合い、現在の複合扇状地が形成された。竜西扇状地は、伊那谷の中でも最も広いが、これは、上伊那南部の扇状地による土石が天竜川をせき止めたことと、中央アルプスと交差する境峠断層により、中央アルプスの主要部が大きく西へ移動し、同様に経ヶ岳山麓の活断層帯も西へ崩れたため平らな盆地が造られたという二つの理由により、両アルプスから搬出された砂や礫が盆地内に蓄えられたためとされている。その後、扇状地が侵食され、田切地形と呼ばれる深い谷状の特徴的な地形が生まれた。箕輪町でも天竜川に注ぐ桑沢、北の沢、深沢、帯無などの各中小河川の扇状地扇端部にそれを観ることができる。

上空より遺跡地を望む

次に、箕輪町のもう一つの特徴的な地形景観である段丘に目を向けると、竜西地区では、天竜川より２ないし３列からなる階段状の崖として確認できる。伊那谷各地でみられるこの段丘崖は、以前は天竜川が形成した河岸段丘と考えられていたが、現在では活断層の活断運動によって造りだされた断層崖ということが各地で確認されている。箕輪町でも、局地的な地質調査が進めば、この段丘がどのように形成されたかわかるであろう。一方竜東地区では、唯一沢川の造りだした扇状地の南側だけが平坦な地形である。他の地域は山が近いせいもあり、変化に富んだ地形を造りあげている。特に最南端の福与地区では、天竜川に流れ込む中小河川が小規模な扇状地を掘り込んだ結果、丘陵地形が配列し、地形変化を更に複雑にしている。しかしながら現在では構造改善が進み、そうした地形の複雑な変化は古い写真や地図で確認できるだけという場合が多く、元の地形を推測するのは難しくなってきている。地形と同じように、竜東と竜西では地質の面においても対照的で基盤岩の質も異なる。竜東側では基盤岩を覆っている被覆層は、比較的浅く断片的であるため、支流の川沿いには基盤岩が広く露出し、天竜川まで続いている。竜西側では、竜東に比べ被覆層が厚いため基盤岩の露出は少ない。また、御岳テフラの終息期以降も各支流より礫の押し出しが続き、後氷期の黒ボク土までを含む土壌と砂礫が混合して、扇状地の地形が続いたとされる。

今後箕輪町においても、遺跡が立地する環境を理解するために、更に詳しい地質調査が必要となるであろう。

第２節　周辺の歴史的環境

箕輪町は、東西の複合扇状地を流れる中小河川や段丘下の湧水など水源に恵まれており、先史より人が暮らしやすい好的な場が多い。町内には、先人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が残されており、平成６～８年度に実施した箕輪町遺跡詳細分布調査では、包蔵地182箇所、古墳27基、城跡13箇所を確認し、上伊那郡下においても屈指の遺跡地帯といえる。

今回調査対象となった本遺跡を含む天竜川右岸には、河岸段丘の突端部にみられる遺跡と、深沢川や帯無川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に存在する遺跡が分布している。また、段丘崖下には広大な箕輪遺跡が広がる。いずれの遺跡も水源に隣接して分布する傾向が見られる。

段丘突端部に位置する中山遺跡は（68）は、これまでに縄文・平安時代の住居址が確認されている。同じ段丘上の北方には本城遺跡（67）があり、本遺跡と同じ縄文・平安時代の遺構が確認されている。さらに北方には上伊那地方唯一の前方後円墳である、松島王墓古墳が存在する。南に目を向けると、上の林遺跡（84）がある。ここは、縄文・弥生・平安時代の集落址が確認されており、町内でも有数の出土量を誇る遺跡である。

この段丘下にはもう一つ段丘があり、東町（73）、旭町（74）、仲町（76）、南町（77）等の遺跡があり、こうした遺跡では縄文・平安時代に加えて、弥生・古墳時代の遺物が採集されている。

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代								立地	地目	備考
			旧	縄	弥	古	奈	平	中	近			
68	**中山**	**松島**		○				○	○		**段丘突端**	**宅地・畑**	**調－昭60・61・62年**
67	本城	〃		○	○	○	○	○	○		段丘突端	宅地・畑	調－平5・6・8・10・19年(含城跡)
69	藤山	〃		○							段丘突端	宅地・畑	
71	北町	〃		○	○	○		○	○		段丘突端	宅地・畑	
72	神社付近	〃		○	○			○			平地	宅地・畑	
73	東町	〃		○	○	○		○	○	○	段丘突端	宅地・畑	
74	旭町	〃		○	○	○		○			段丘突端	宅地・畑	調－平10・11年
75	通り町	〃						○			段丘突端	宅地・畑	調－平10・11年
76	仲町	〃		○	○	○		○	○		段丘突端	宅地・畑	調－平3・4・8・9年
77	南町	〃			○	○		○	○		段丘突端	宅地・畑	
84	上の林	木下		○	○			○			段丘突端	宅地・畑	調－昭55～57・60・平2・4・19年
189	仲町古墳	〃				○					段丘突端	公園	消滅　調－平3・4・8・9年

第１表　周辺遺跡一覧表

第２図　周辺遺跡分布図（１：12,500）

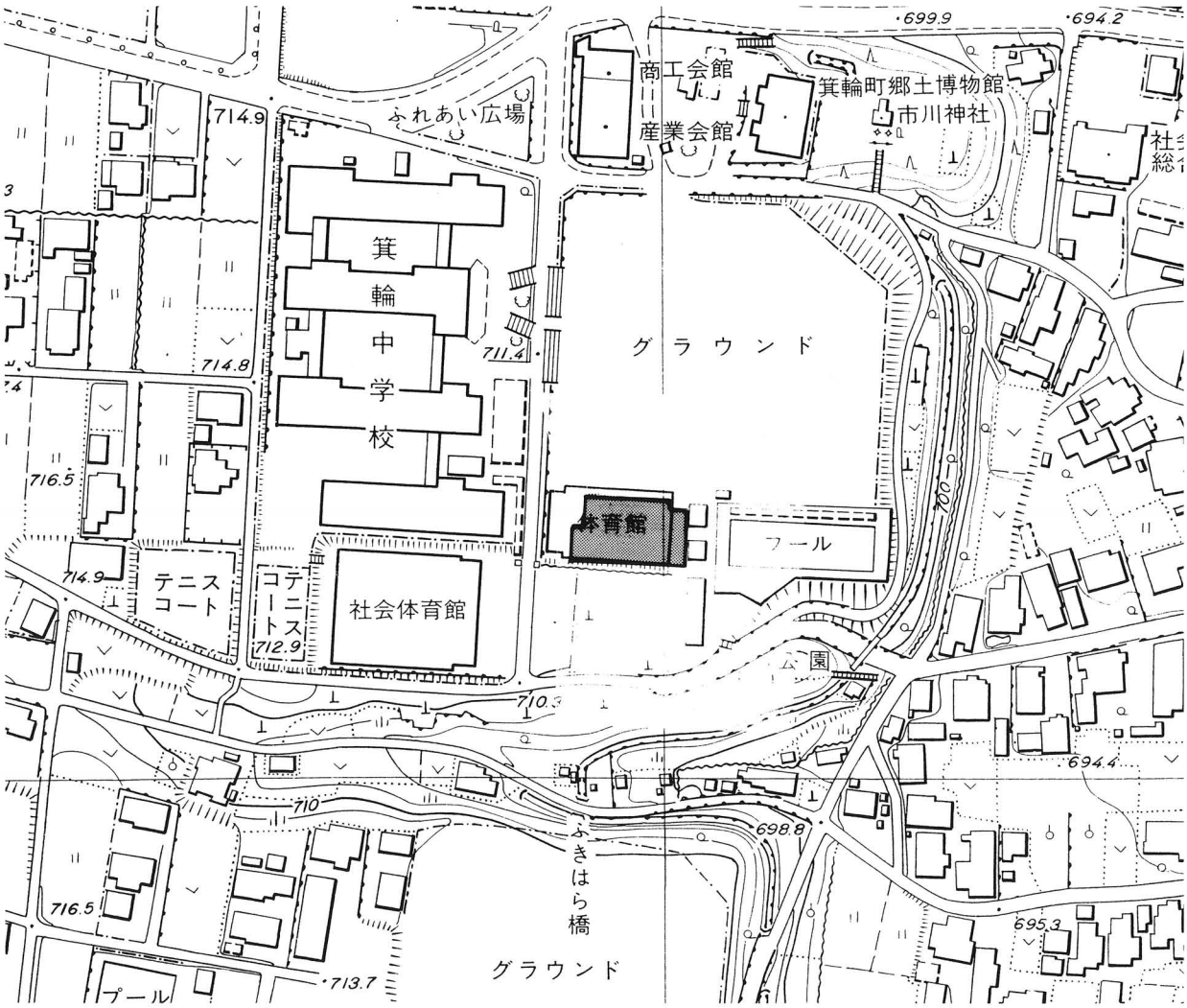
第３章　調査結果

第１節　　調査方法

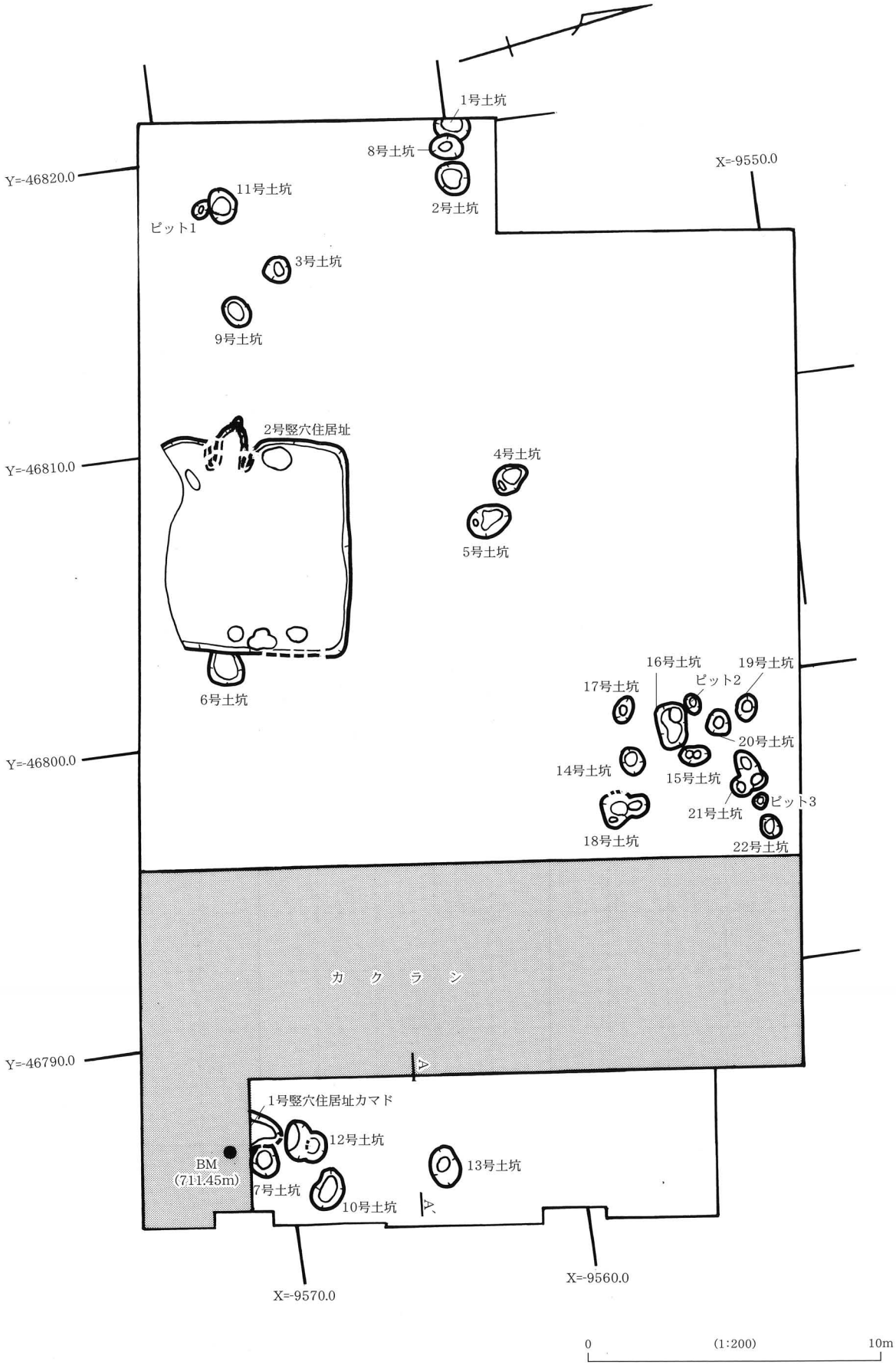
発掘調査は、体育館改築工事によって文化財が消滅する事が予測される1,036.69㎡のうち、既存体育館建設の際に削平された西部を除いた、約800㎡を対象とした。

作業手順としては、まず大型重機により遺構確認層直上までの表土を除去し、続いて人力による遺構検出作業を進め、検出した各遺構の掘り下げを行った。各遺構より出土した遺物のうち、各遺構の覆土中の土器片については層位ごとに取り上げ、床面直上の遺物は記録後に番号を付けて取り上げた。

測量による記録作業は、遺構平面図及び遺構から出土した遺物は、平板及び簡易遣り方測量にて１：10縮尺で作図し、土層断面も１：10の縮尺で作図した。座標及び方位はトータルステーションを使用し、調査地全域を世界測地系の基準線を重ねて記録した。また、標高の基準点は、調査区東部のマンホールの蓋に任意のベンチマーク（711.45m）を設定した。写真による記録は、一眼レフデジタルカメラ撮影と、35㎜一眼レフカメラによるカラーリバーサルフィルム撮影を行った。なお、本書に掲載した遺物写真は、一眼レフデジタルカメラにて撮影した。



第３図　調査区設定図（１：2,500）



第４図　調査区遺構配置図（全体図）

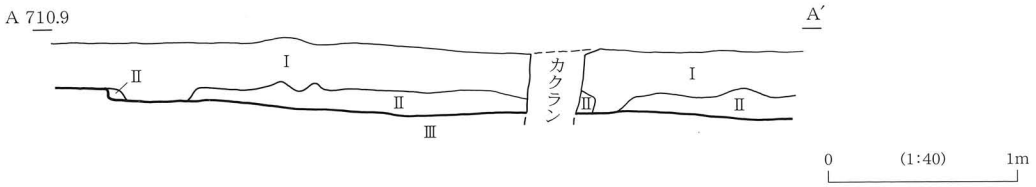
第２節　　土層堆積状況（第５図）

調査地は昭和30年の体育館建設の際に表土を削平しているため、耕作土や人為的堆積層は確認されず、表層の黒褐色土は土器等を含む遺物包含層であった（Ⅰ層）。その下はオリーブ褐色の自然堆積層（漸移層・Ⅱ層）、黄褐色のローム（テフラ）層（Ⅲ層）の３層に分けられた。遺構はⅡ層上面で検出し、Ⅲ層まで掘り込まれる。また、既存体育館の基礎にあたる部分は撹乱され、調査区の西側約３分の２（２区）は転圧によってⅠ層が固く叩き締められていた。各層の詳細は以下の通りである。

Ⅰ層　10YR2/3（黒褐色）遺物包含層。締り・粘性共にやや強い。

Ⅱ層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）漸移層。暗褐色土を30％含む。締り・粘性共にやや強い。

Ⅲ層　2.5Y5/6（黄褐色）ローム（テフラ）層。締り・粘性共にやや強い。



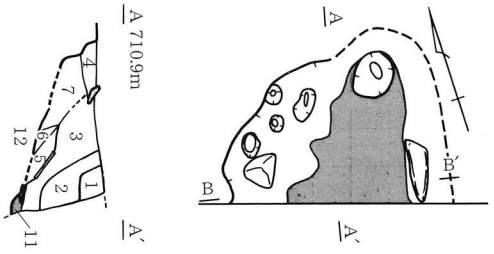
第５図　土層断面図（１区）

第３節　遺構と遺物

１　竪穴住居址

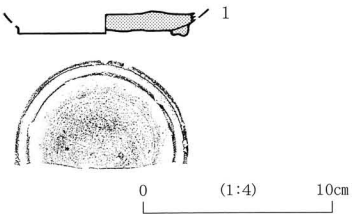
１号竪穴住居址（カマドのみ検出）（第６図）

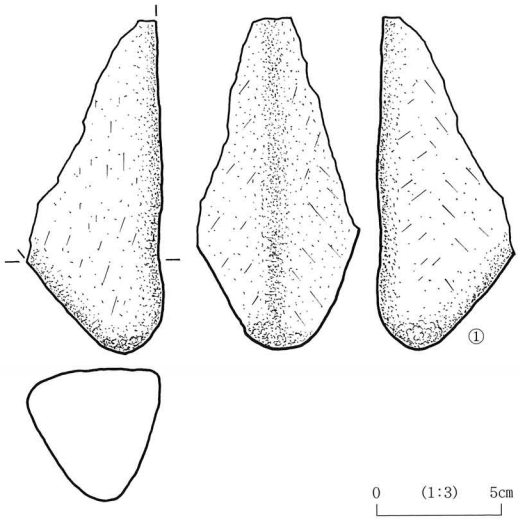
位置：調査区南東部、世界測地系Ｘ＝－9570.70、Ｙ＝－46776.80に位置する。**主軸方向**：カマドの位置から推定すると、凡そＮ－15°－Ｅ方向ではないかと思われるが詳細は不明。**規模・形状**：不明。**覆土**：不明。**床面・壁**：不明。**カマド**：締りの強い土（６・７層）で構築された袖部と芯石が左右に確認され、中央部の底面には火焼面（11層）があり、強く火焼を受けていた。**柱**



			締り	粘性
1層	10YR3/4(暗褐色)	ローム粒子3%含む	強	弱
2層	10YR4/4(褐色)	ローム粒子5%、炭化物5%、焼土1%含む	中	弱
3層	10YR3/3(暗褐色)	ローム粒子30%、炭化物3%、焼土1%含む	中	中
4層	10YR4/6(褐色)	炭化物1%含む	中	弱
5層	2.5Y5/4(黄褐色)	焼土1%含む	中	中
6層	7.5YR4/4(褐色)		中	中
7層	10YR4/3(にぶい黄褐色)	小礫を含む	強	中
8層	10YR3/3(暗褐色)	ローム粒子30%、炭化物1%、焼土50%含む	中	弱
9層	2.5Y4/6(オリーブ褐色)	炭化物3%、焼土5%含む　カマド構築土	強	強
10層	7.5YR5/8(明褐色)	炭化物5%、焼土50%以上含む　カマド構築土	強	中
11層	7.5YR4/4(褐色)	炭化物3%、焼土50%以上含む	強	強
12層	2.5Y5/6(黄褐色)	ローム層	強	中

第６図　１号竪穴住居址カマド実測図



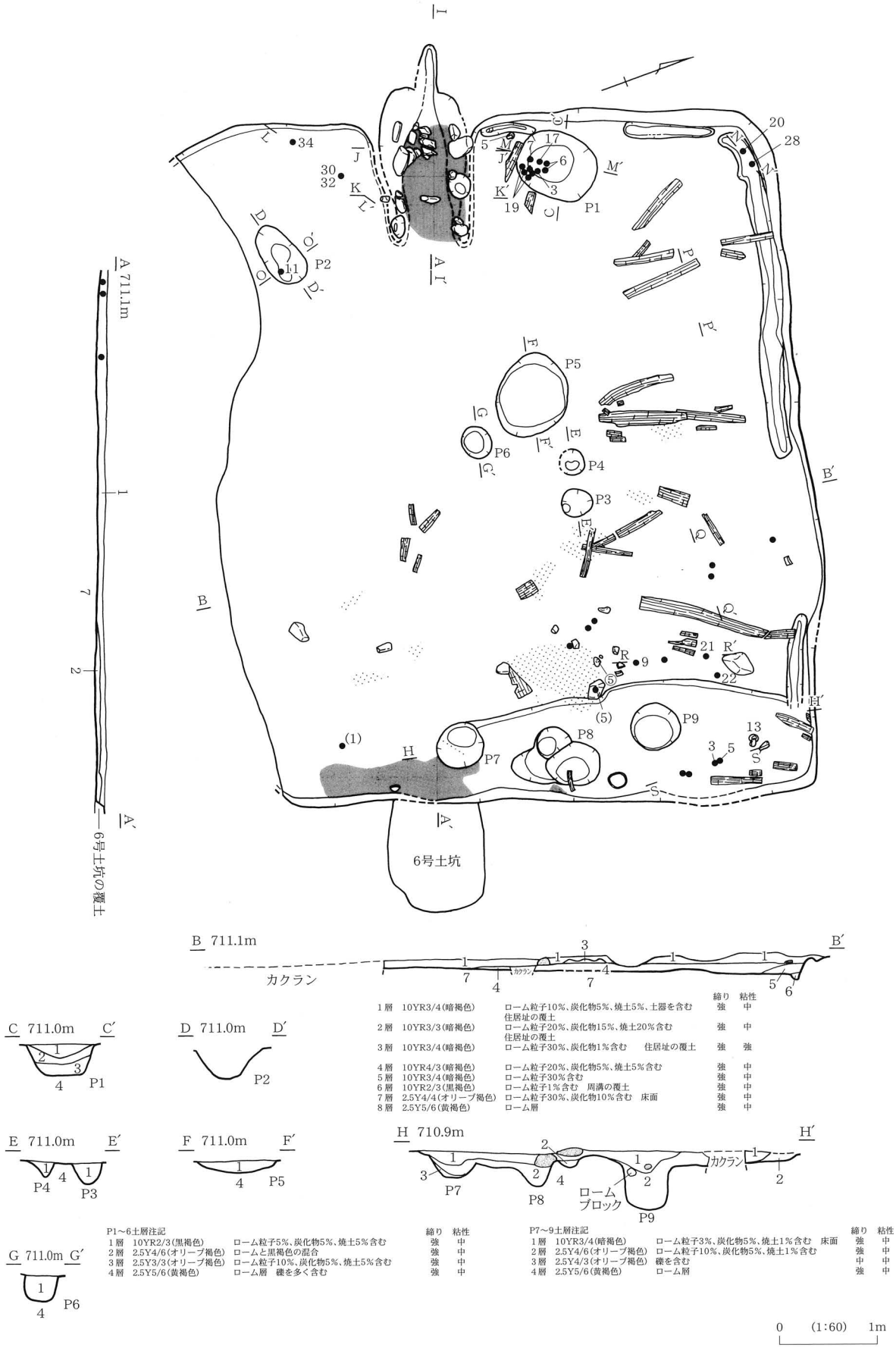


第７図　１号竪穴住居址出土土器・石器実測図

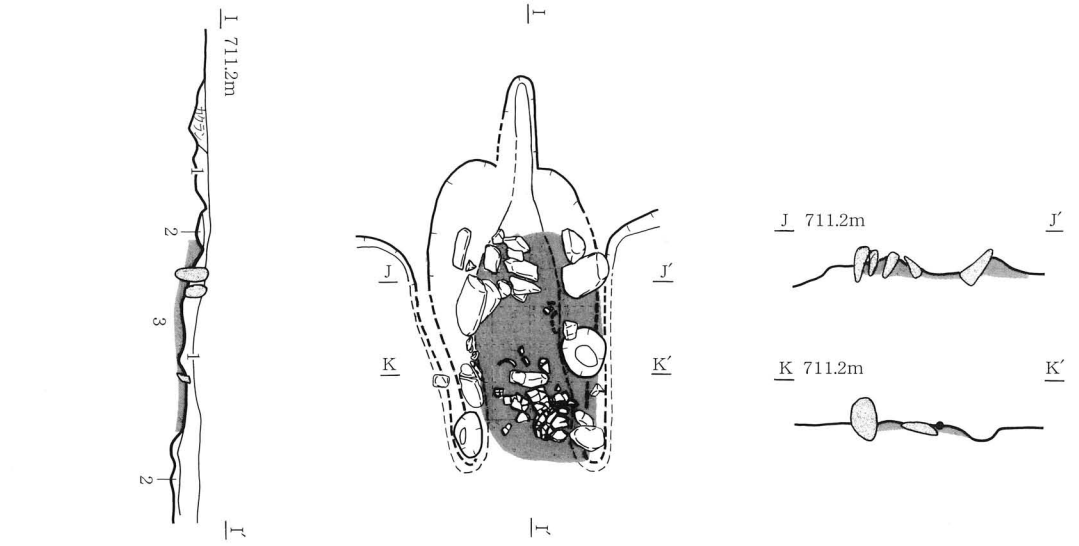
穴：不明。**その他の施設**：不明。**遺物**：須恵器の高台付坏（１）と長胴甕が出土した。しかし、形になるものは少なかった。石器は敲・磨石①が出土したが、混入品と思われる。**時期**：平安時代初頭と推測する。

２号竪穴住居址（第８、９図）

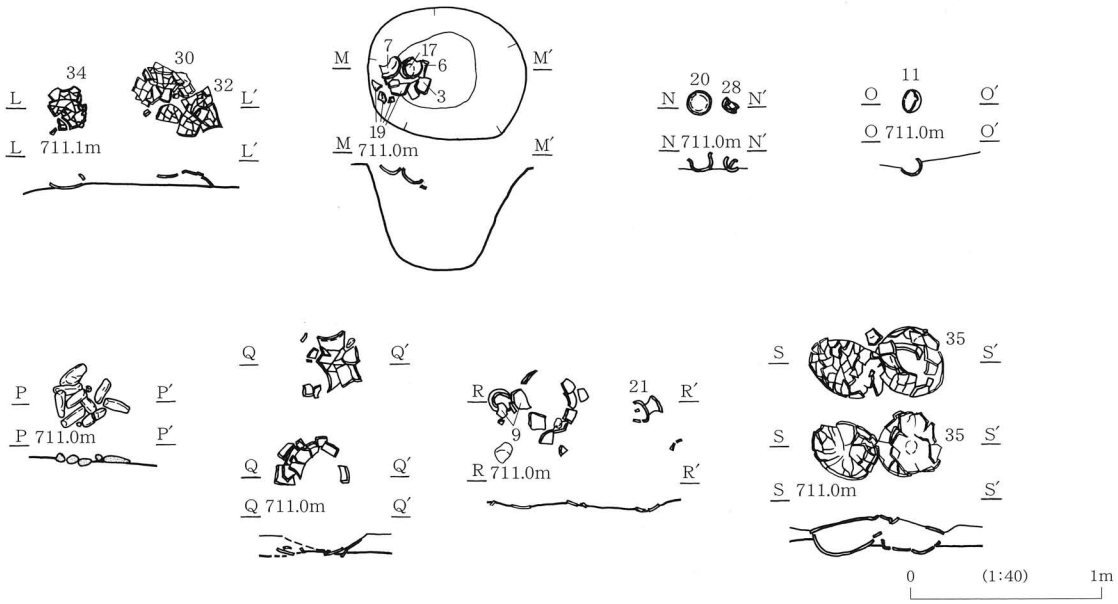
位置：調査区南部、世界測地系Ｘ＝－9569.40、Ｙ＝－46806.60に位置する。**主軸方向**：Ｎ－72°－Ｗ。**規模・形状**：長軸7.96m、短軸（6.24）ｍを測り、方形を呈すると思われるが、本址南側が撹乱されていたため詳細は不明。６号土坑と接する。**覆土**：８分層され、全体的にローム粒子、炭化物、焼土が含まれていた。**床面・壁**：既存体育館建設の際、人力で転圧されていたため、覆土は全面が強固に固められていたが、床面は軟弱であった。本住居址北側の床面直上付近より、大量の炭化物及び住居の垂木と思われる炭化した木材が検出された事から、本址は火事による焼失住居であると推測される。壁残高は上面を削平されているため僅かであったが、10㎝～24㎝確認され、傾斜はほぼ垂直に立ち上がる。壁下には一部周溝が検出された。**カマド**：本址西側中央の壁に接して検出されたが、上部はほぼ削平されており、袖部は検出できなかったが、西方向に煙道が突き出していた。中央部の底面に火焼面（３層）が確認され、それを囲むように芯石と思われる石（火焼痕なし）や芯石が埋められていたと思われる穴が検出された。それらを踏まえてカマドの大きさを推測すると長軸２ｍ超となり、大型カマドであった事が推測される。**柱穴**：明確な柱穴は検出できなかった。**その他の施設**：カマドの北側に位置するＰ１から坏が多く出土した。また、東壁に接した一段低い箇所から、床面の構築土が乗った状態でピットが３つ確認された（Ｐ７～９）。その内Ｐ９は柱穴の可能性も考えられる深いピットで、土器（22・24）も出土しているが、床面直上から出土した同型の土器と大きな時代の差異は認められない。６号土坑に隣接する東側中央の壁付近から焼土が検出されている事から考えると、本址は始め東側にカマドがあったが、何らかの理由で西側へ改築された可能性も考えられる。また、本址東壁に接した６号土坑の形状が隅丸方形、底面が平坦であり、土坑としては不自然な形である事を考えると、６号土坑は本住居址に関わる遺構である可能性も考えられる。**遺物**：須恵器は坏（２）が１点出土している。土師器では坏（３～19）と高坏（20～22）が出土した。坏は丸底のものが多く、口縁が外反しているものもみられる。また、形にはならなかったが内外面黒色処理された土師器の坏片もいくつか出土した。その他、手捏ねのミニチュア土器（23～25）、小型壺（26）、甕（27～32）、甑（33）、球状を呈した壺（34）が出土した。ロクロを使用した土器はみられず、調整もナデ、ヘラケズリが主流である。土製品では土鈴（１）（２）、紡錘車（３）、土玉（４）～（６）が出土した。土鈴は手捏ねで大小１点ずつ出土した。石製品では滑石製の臼玉〈１〉が１点出土している。石器では石錘②、打製石斧③④、凹石⑤、敲・磨石⑥が出土したが、混入品であろうか。さらに、床面直上から編物石と思われる同形石が９個出土した。各遺物の特徴は、観察表（第４～７表）を参照されたい。**時期**：古墳時代後期と推測する。



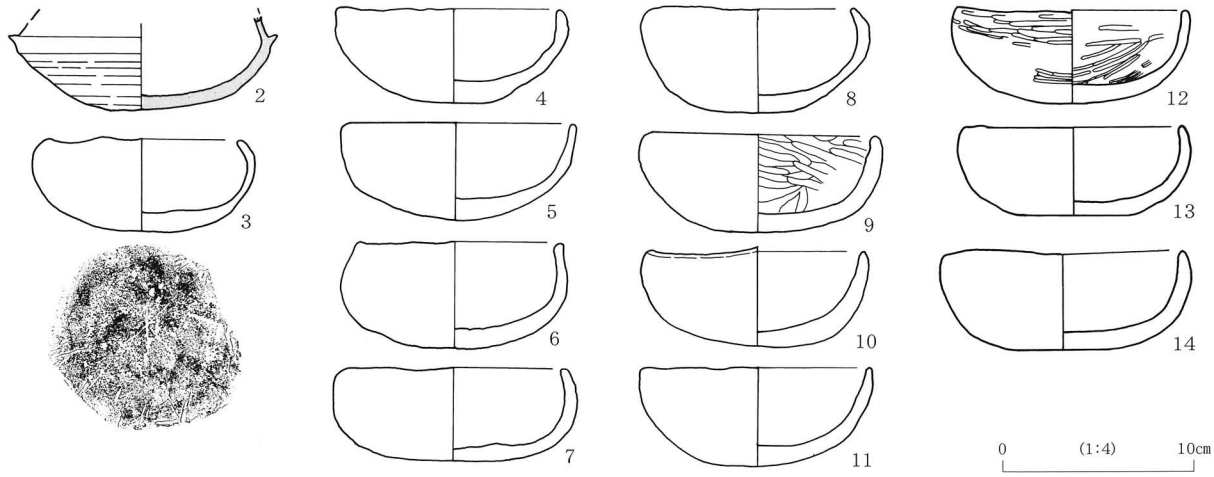
第８図　２号竪穴住居址実測図



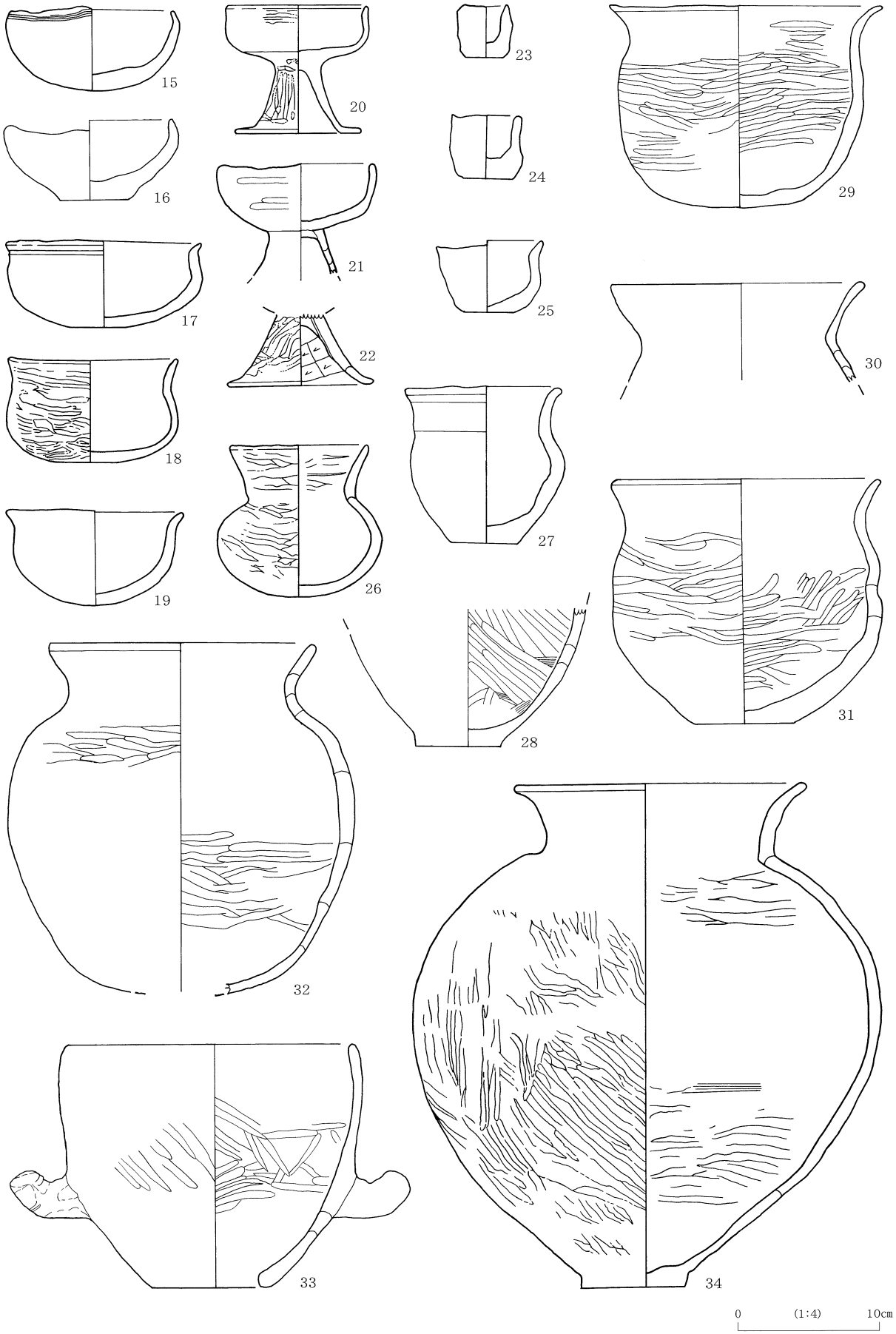
		締り	粘性
1層	10YR3/4(暗褐色) ローム粒子10%、炭化物5%、焼土5%、土器を含む	強	中
2層	10YR4/4(褐色) ローム粒子5%、炭化物5%、焼土3%含む	極強	中
3層	2.5Y5/6(黄褐色) ローム層	極強	中
火焼面	7.5YR5/6(明褐色) 炭化物30%、焼土30%含む	極強	中



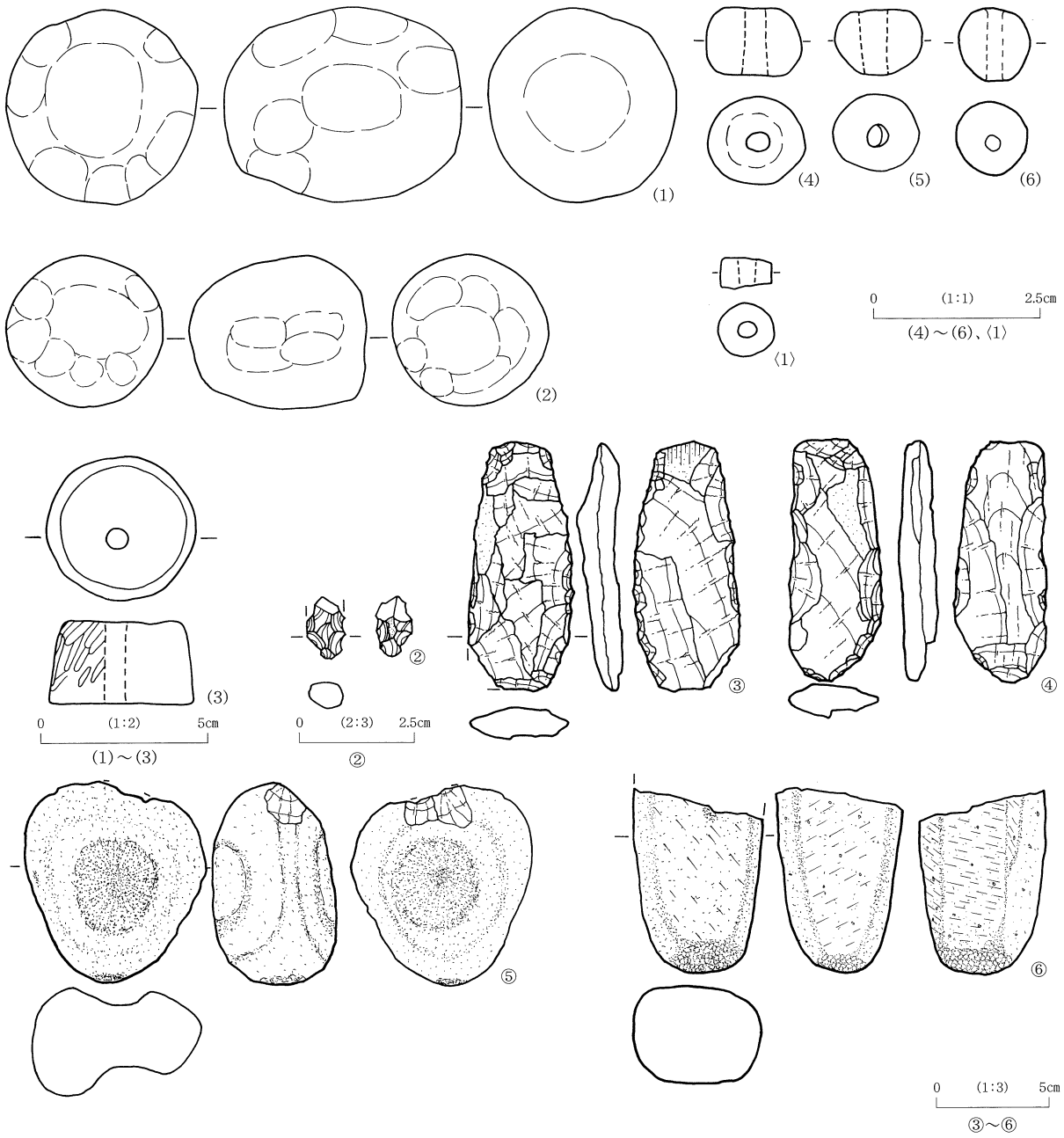
第９図　２号竪穴住居址カマド実測図・遺物出土状況



第10図　２号竪穴住居址出土土器実測図（１）



第11図　２号竪穴住居址出土土器実測図（２）

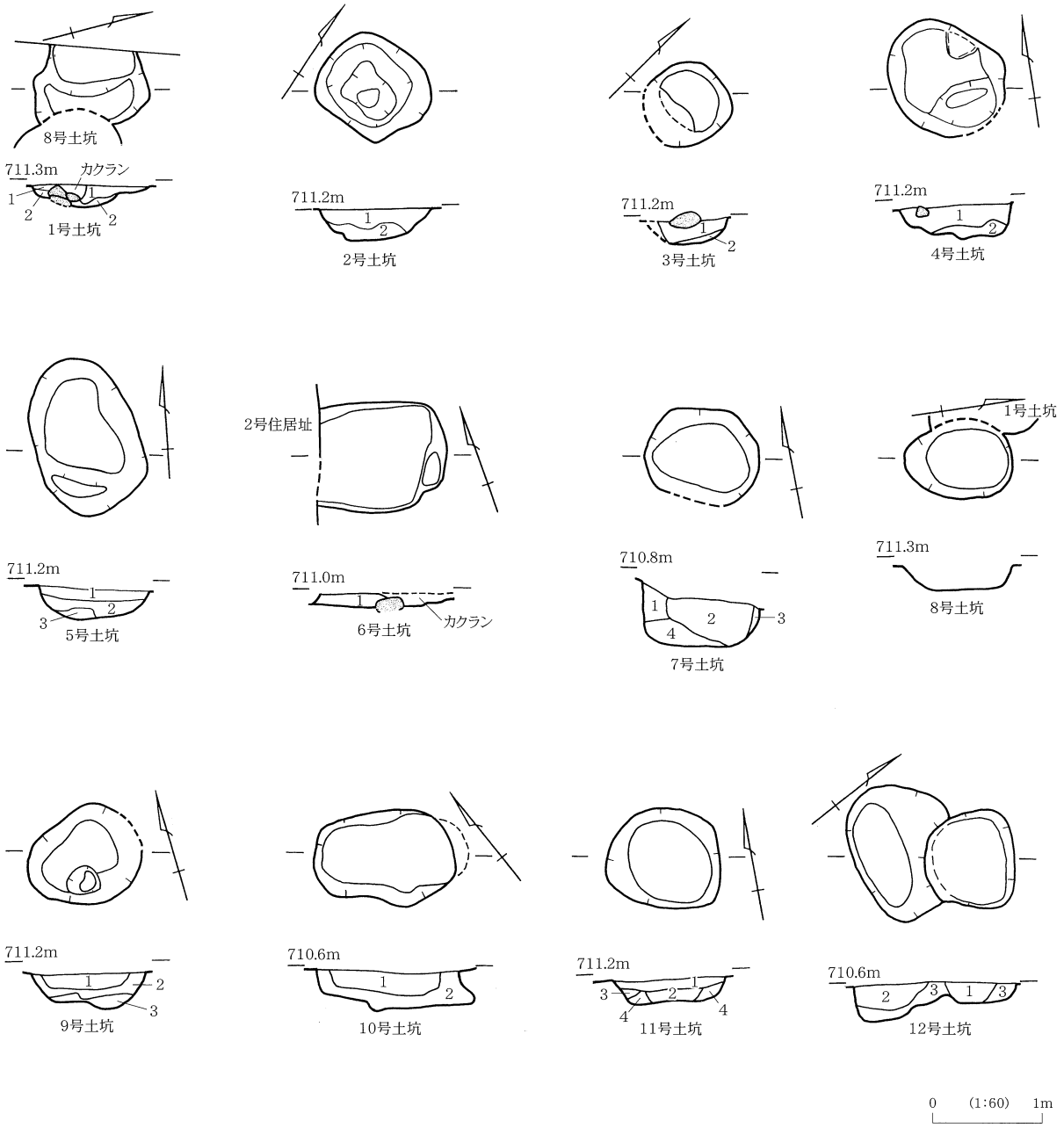


第12図　２号竪穴住居址出土土製品・石製品・石器実測図

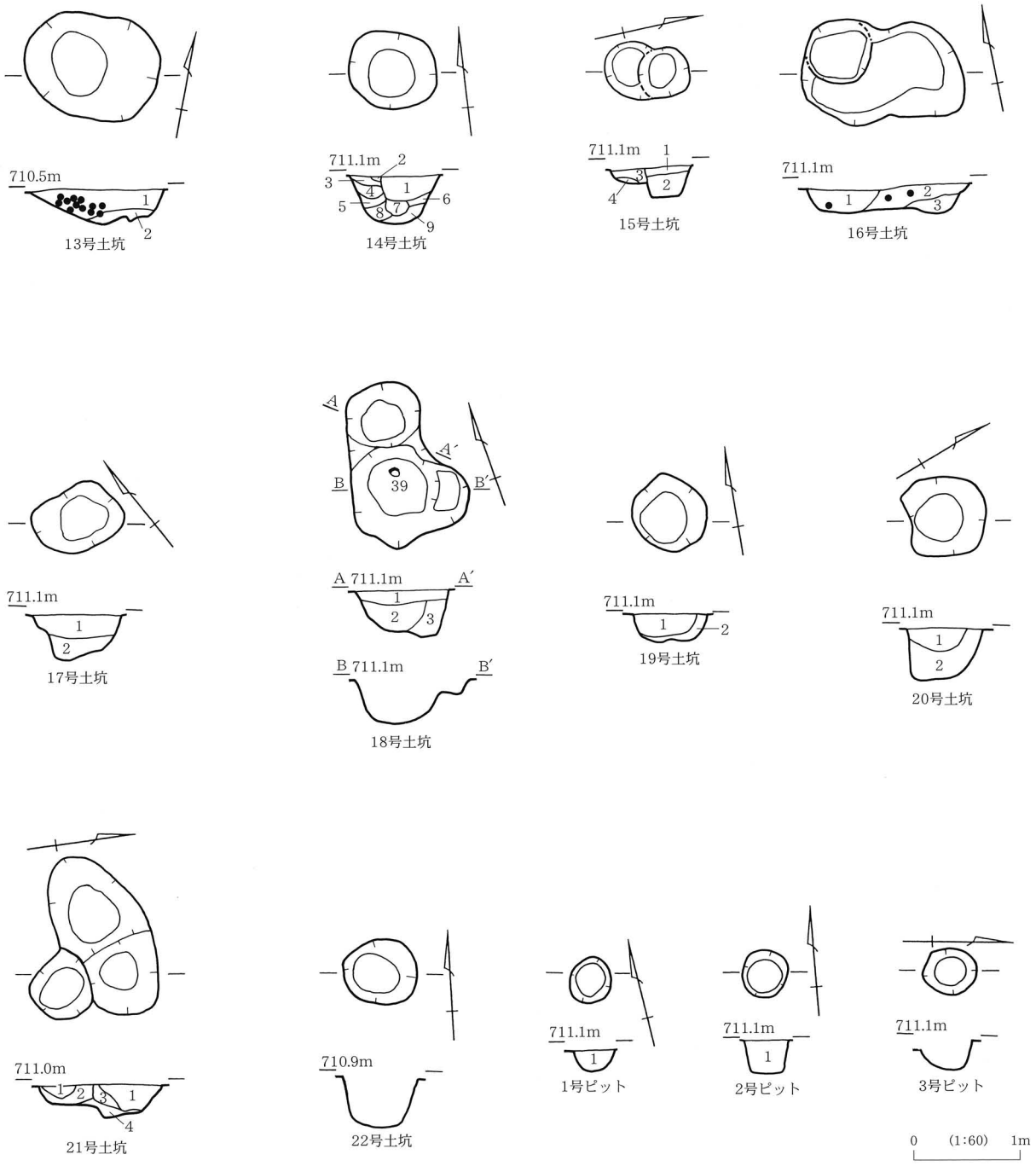
２　土坑・ピット

土坑22基、ピット３基が検出された（直径50cm以上のものを土坑、未満のものをピットとした）。土坑は調査区の北側及び西側と、東側に検出された。本調査区（２区）は、旧体育館建設時の削平と敲き締め、更に礎石（グリ石）の設置により、遺構が検出できた箇所は少なかった。また、その影響により覆土の締りは強いものが多い。出土遺物はほとんどが縄文時代中期の土器片で、特に初頭のものが多く出土している（1、10、13、15、19、21、22号土坑）。２次調査の際、本調査地の東側から縄文時代

中期初頭の竪穴住居址が検出されている事から、これらは２次調査で検出された竪穴住居址とほぼ同時期の遺構であると考えられる。ただ、18号土坑は、縄文前期末と思われる遺物も出土しており、前述の土坑より時代が遡る可能性がある。出土土器は、深鉢が５点（35～39）出土している。ほとんどが縄文時代中期初頭の様相を呈するが、（38）は細隆帯を斜格子に貼付しており、縄文時代前期末と思われる。土製品は土偶（７）～（10）が出土している。（10）は板状土偶と思われ、頭部中央に窪みがある。石器は石鏃⑨、石匙⑦、打製石斧⑧⑩⑪が出土している。詳細はピット一覧表（第２表）・土坑一覧表（第３表）を参照されたい。



第13図　土坑実測図



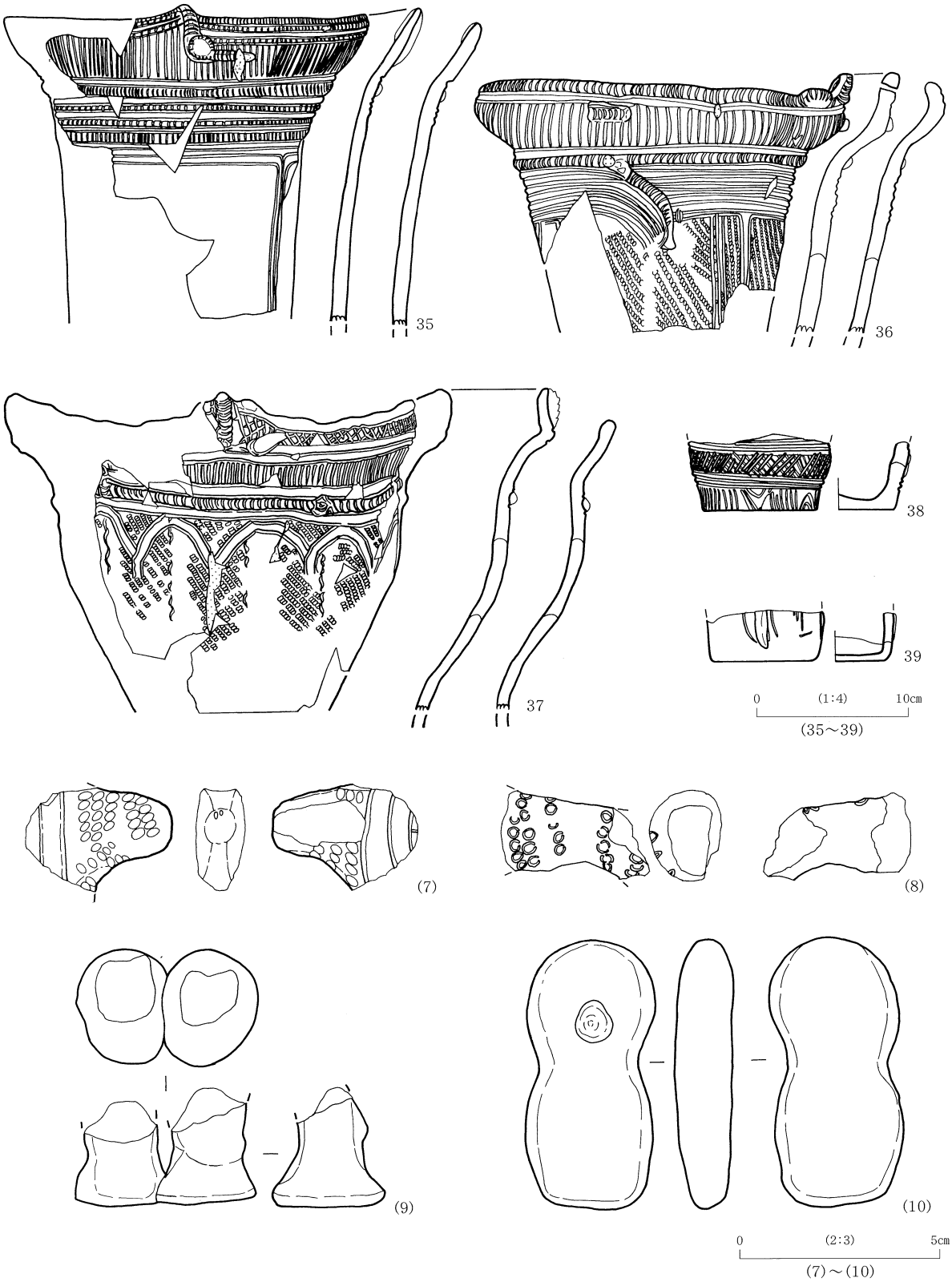
第14図　土坑・ピット実測図

No.	規模（cm）			平面形	断面形	覆　土	締り	粘性	出土遺物	備考
	長	短	深							
1	43	40	20	円形	半円	1層　10YR3/4（暗褐色）　ローム粒子3%、炭化物10%、焼土5%含む	強	強		
2	45	41	31	円形	台形	1層　10YR3/3（暗褐色）　ローム粒子5%含む	極強	中		
3	49	43	(25)	円形	半円				縄文時代	

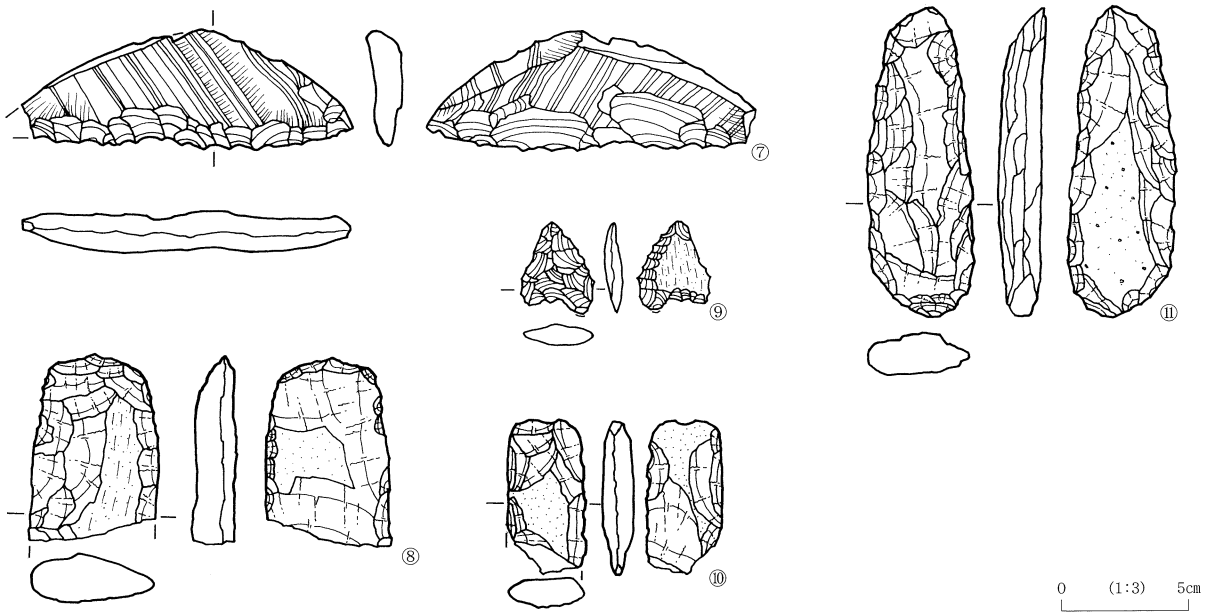
第２表　ピット一覧表

No.	規模（cm）			平面形	断面形	覆　土	締り	粘性	出土遺物	備考
	長	短	深							
1	(104)	(78)	20	不形楕円形	浅い半円	1層　7.5YR3/4（暗褐色）ローム粒子10％含む 2層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）	極強 強	弱 弱	縄文中期初頭	
2	106	83	27	楕円形	浅い半円	1層　7.5YR3/4（暗褐色）ローム粒子10％含む 2層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）	極強 強	弱 弱	内黒処理坏	
3	(82)	65	24	円形	浅い半円	1層　7.5YR3/4（暗褐色）ローム粒子10％含む 2層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）	極強 強	弱 弱	少量	
4	(111)	94	31	楕円形	浅い半円	1層　7.5YR3/4（暗褐色）ローム粒子10％含む 2層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）	極強 強	弱 弱		
5	144	88	27	楕円形	浅い半円	1層　7.5YR3/4（暗褐色）ローム粒子10％含む 2層　2.5Y4/4（オリーブ褐色） 3層　2.5Y5/6（黄褐色）炭化物1％含む	極強 強 強	弱 弱 中	縄文時代	
6	114	100	13	隅丸方形？	不整形	1層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子1％含む	強	中		
7	104	(82)	45	楕円形	半円	1層　2.5Y4/6（オリーブ褐色）炭化物3％、焼土5％含む 2層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子、炭化物、焼土を1％含む 3層　2.5Y4/4（オリーブ褐色） 4層　10YR2/3（黒褐色）ローム粒子5％含む	強 中 強 中	強 中 中 中	縄文中期	
8	98	(72)	(21)	楕円形	浅い半円				縄文中期	
9	95	80	33	楕円形	浅い半円	1層　7.5YR3/3（暗褐色）ローム粒子を1％含む 2層　2.5Y4/3（オリーブ褐色）土器を含む 3層　2.5Y6/6（黄褐色）土器を含む	極強 極強 強	弱 中 中	縄文中期	
10	137	77	36	楕円形	浅い半円	1層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子3％含む 2層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子20％含む 3層　2.5Y4/6（オリーブ褐色）ローム粒子10％含む	強 中 中	中 強 中	縄文中期初頭	
11	108	92	21	円形	浅い円形	1層　7.5YR3/3（暗褐色）ローム粒子1％含む 2層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子5％、焼土1％含む 3層　2.5Y5/4（黄褐色） 4層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）	極強 極強 極強 強	弱 中 中 中	縄文中期	
12	146	121	32	不整形	不整形	1層　10YR3/4（暗褐色）ローム粒子5％含む 2層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子3％含む 3層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）漸移層	強 強 中	中 中 中	縄文時代	土坑重複
13	125	97	33	楕円形	浅い半円	1層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子5％含む 2層　10YR3/4（暗褐色）ローム粒子30％含む	強 強	中 中	縄文中期初頭 (35,36)	
14	85	73	43	円形	半円	1層　10YR2/3（黒褐色）ローム粒子10％、炭化物1％含む 2層　10YR3/4（暗褐色）ローム粒子15％含む 3層　2.5Y4/6（オリーブ褐色） 4層　2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）ローム粒子5％含む 5層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）黒色土1％含む 6層　2.5Y4/4（オリーブ褐色） 7層　10YR3/3（暗褐色） 8層　2.5Y4/3（オリーブ褐色）ローム粒子5％含む 9層　10YR2/3（黒褐色）	極強 極強 極強 強 強 強 中 強 中	中 中 中 中 中 中 中 中 中	少量	
15	80	50	29	不整形	不整形	1層　10YR2/2（黒褐色）ローム粒子10％、炭化物1％含む 2層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子20％、炭化物5％含む 3層　10YR3/4（暗褐色）ローム粒子10％、炭化物1％ 4層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）	極強 強 極強 強	中 中 中 中	縄文中期初頭	土坑重複
16	149	78	26	不整形	浅い半円	1層　10YR2/3（黒褐色）ローム粒子10％含む 2層　7.5YR3/4（暗褐色）ローム粒子10％含む 3層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）	極強 極強 強	中 弱 弱	縄文中期	土坑重複
17	86	56	43	楕円形	半円	1層　10YR2/3（黒褐色）ローム10％含む 2層　10YR2/3（黒褐色）ローム20％含む	極強 強	中 中	少量	
18	156	68	43	不整形	不整半円	1層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子5％含む 2層　10YR2/3（黒褐色）ローム粒子15％含む 3層　10YR3/4（暗褐色）	強 強 強	中 中 中	板状土偶？ （縄文前期末） 縄文前期末～ 中期初頭の土器 (37,38)	土坑重複
19	73	63	27	円形	浅い半円	1層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子10％、炭化物5％含む 2層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）ローム粒子20％含む	強 強	中 中	縄文時代中期 初頭	
20	82	73	49	不整円形	台形	1層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子1％含む 2層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）ローム粒子5％含む	強 中	中 中		
21	160	88	31	不整形	不整形	1層　10YR2/3（黒褐色）ローム粒子5％含む 2層　2.5Y4/4（オリーブ褐色）ローム粒子3％含む 3層　10YR3/3（暗褐色）ローム粒子1％含む 4層　2.5Y4/6（オリーブ褐色）漸移層	強 中 中 中	中 中 強 中	縄文中期初頭 (39)	土坑重複
22	67	60	(48)	円形	台形				縄文中期初頭	

第3表　土坑一覧表



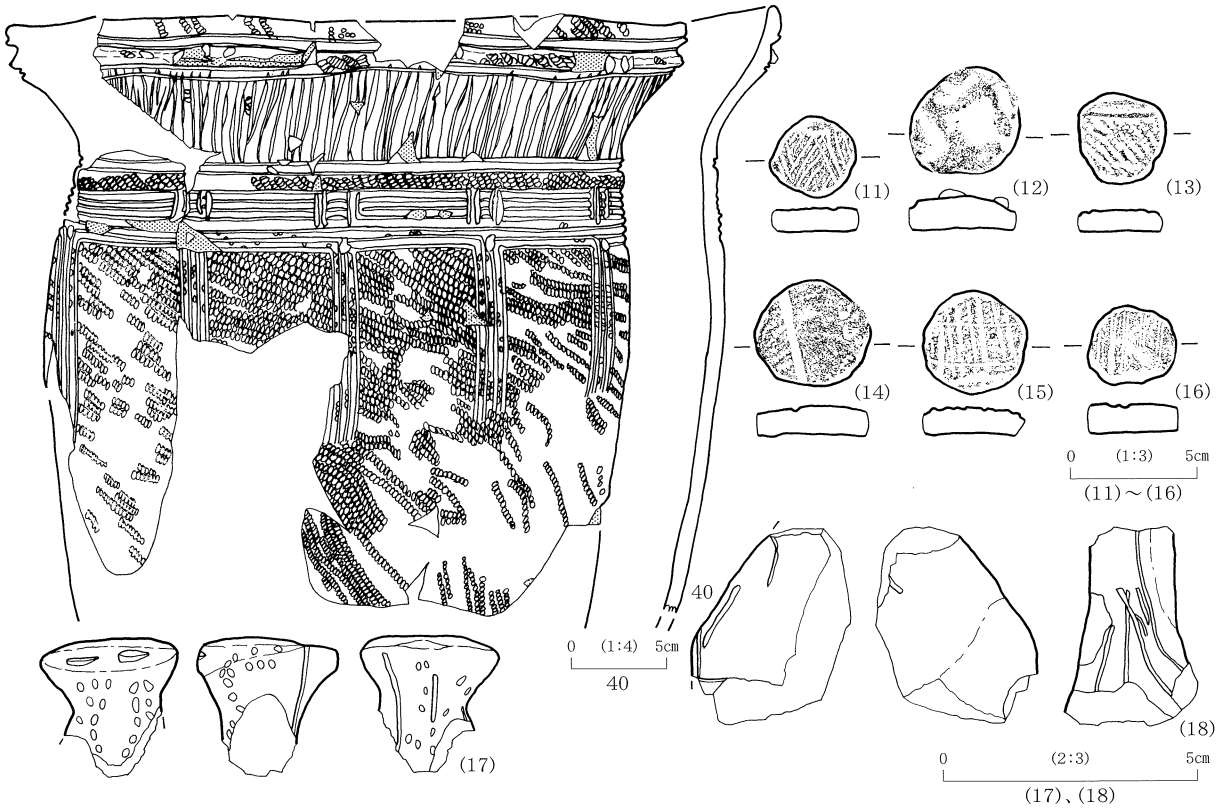
第15図　土坑出土土器・土製品実測図



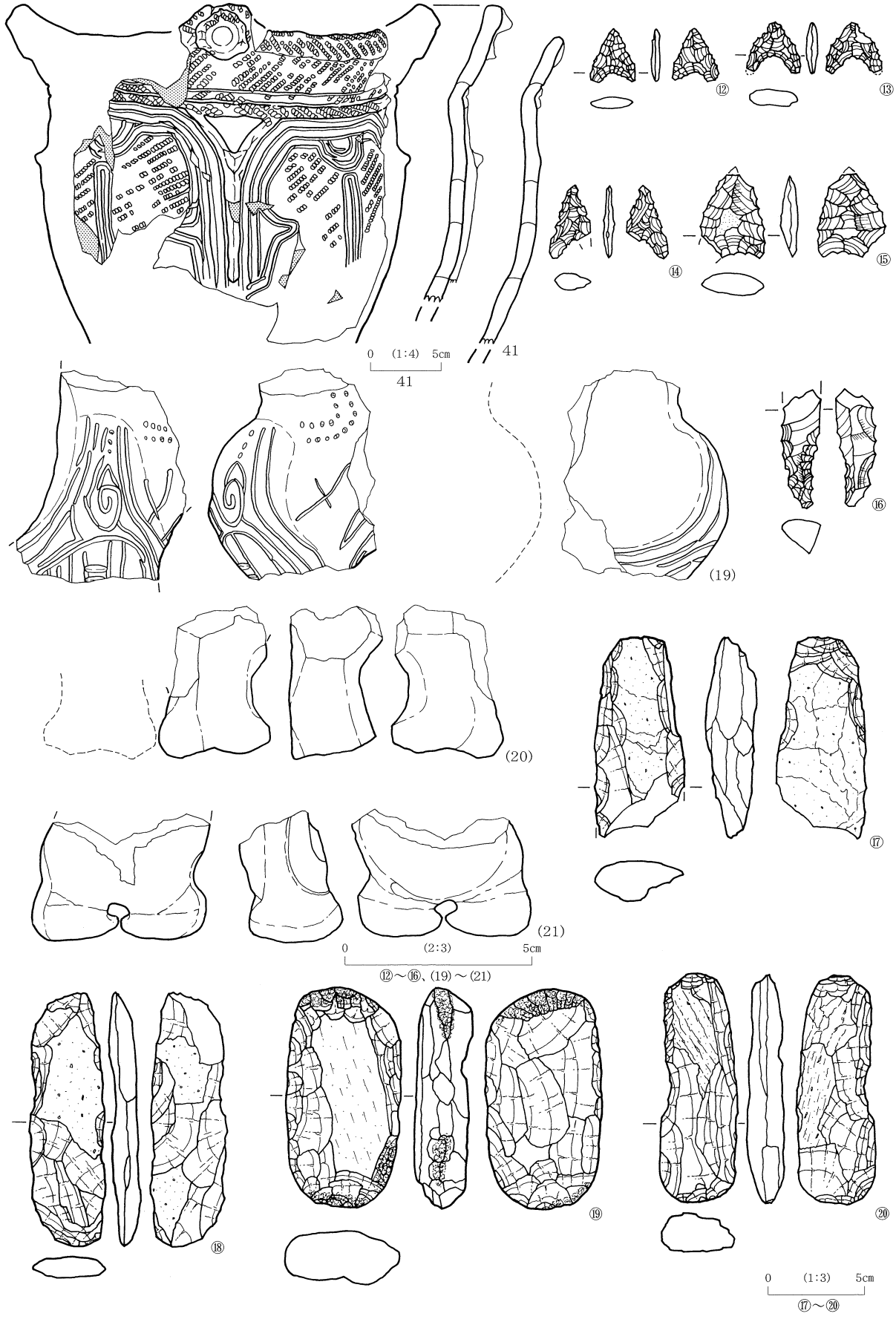
第16図　土坑出土石器実測図

3　遺構外出土遺物

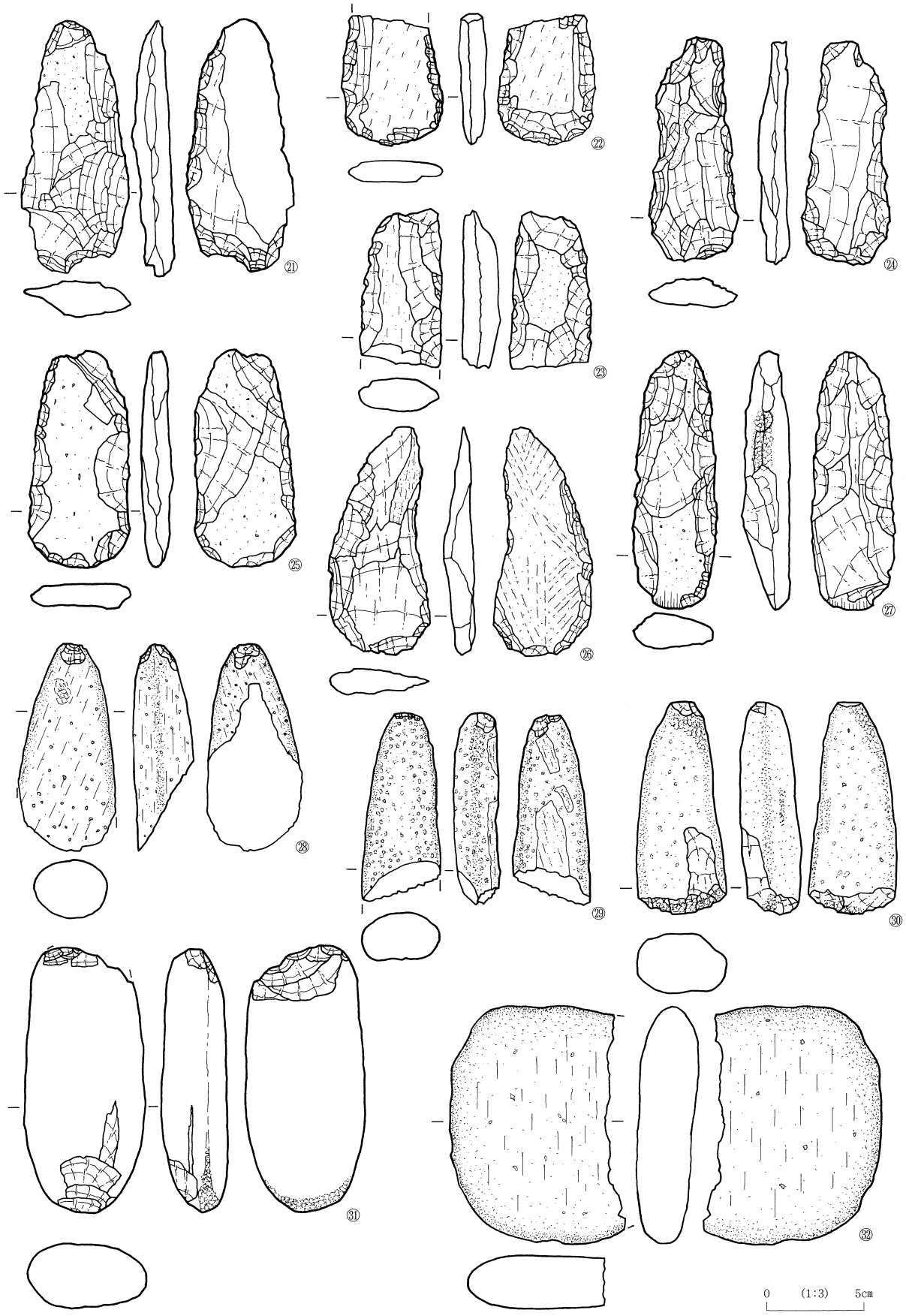
今回の調査では、縄文時代の遺構は土坑のみの検出だったが、遺物包含層（Ⅰ層）から縄文時代の土器、土製品、石器が多く出土している。土器の出土主体は、縄文時代中期初頭と思われ、中葉以降のものは比較的少なかった（第21・22図）。復元できた土器（第17・18図）も、縄文時代中期初頭のものと思われる（40・41）。土製品（第17・18図）は、土製円盤（11）～（16）、土偶（17）～（21）が出土した。石器（第18～20図）は石鏃⑫～⑮、石錐⑯、打製石斧⑰～㉖、磨製石斧㉗～㉚、敲・磨石㉛～㉝、石皿㉞、尖頭器？㉟が出土した。



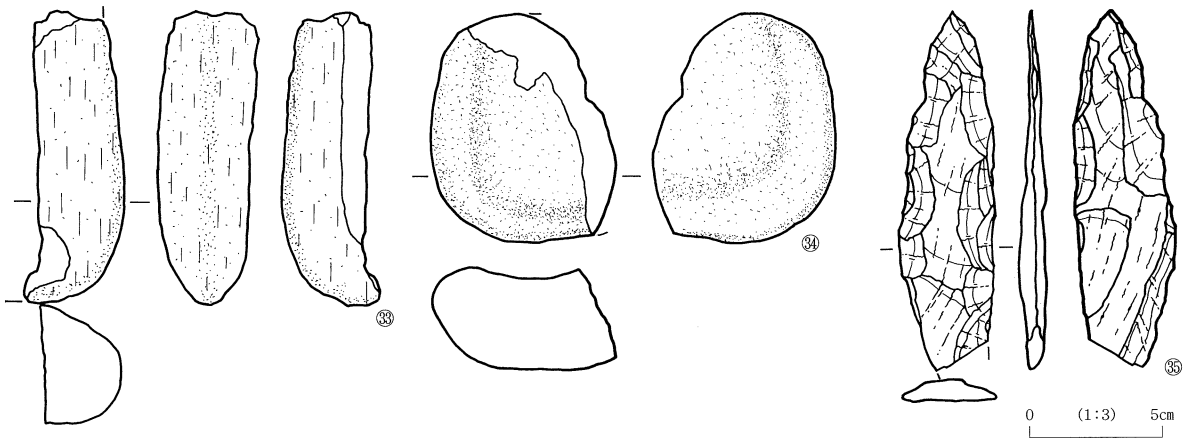
第17図　遺構外出土土器・土製品実測図



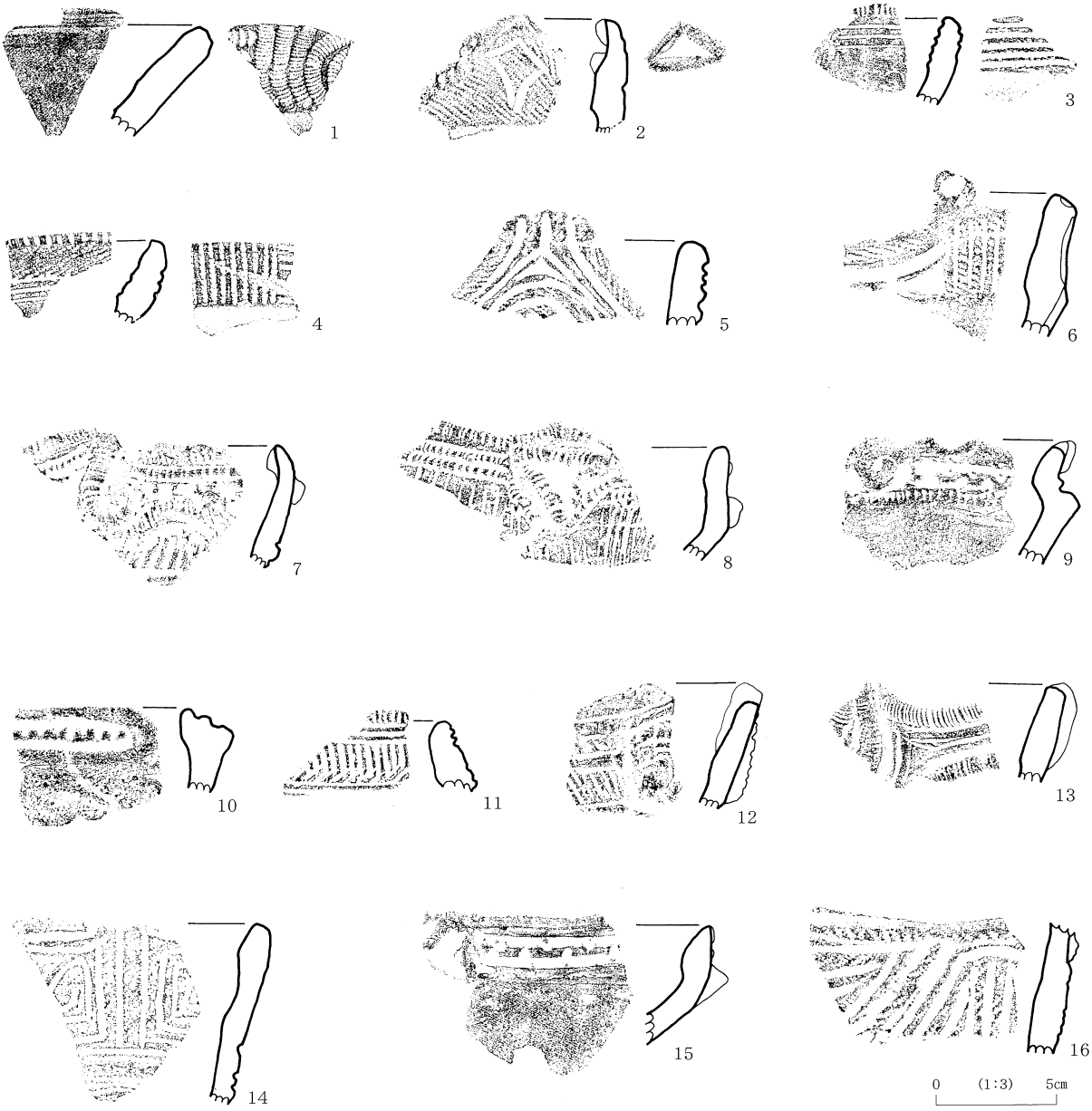
第18図　遺構外出土土器・土製品・石器実測図



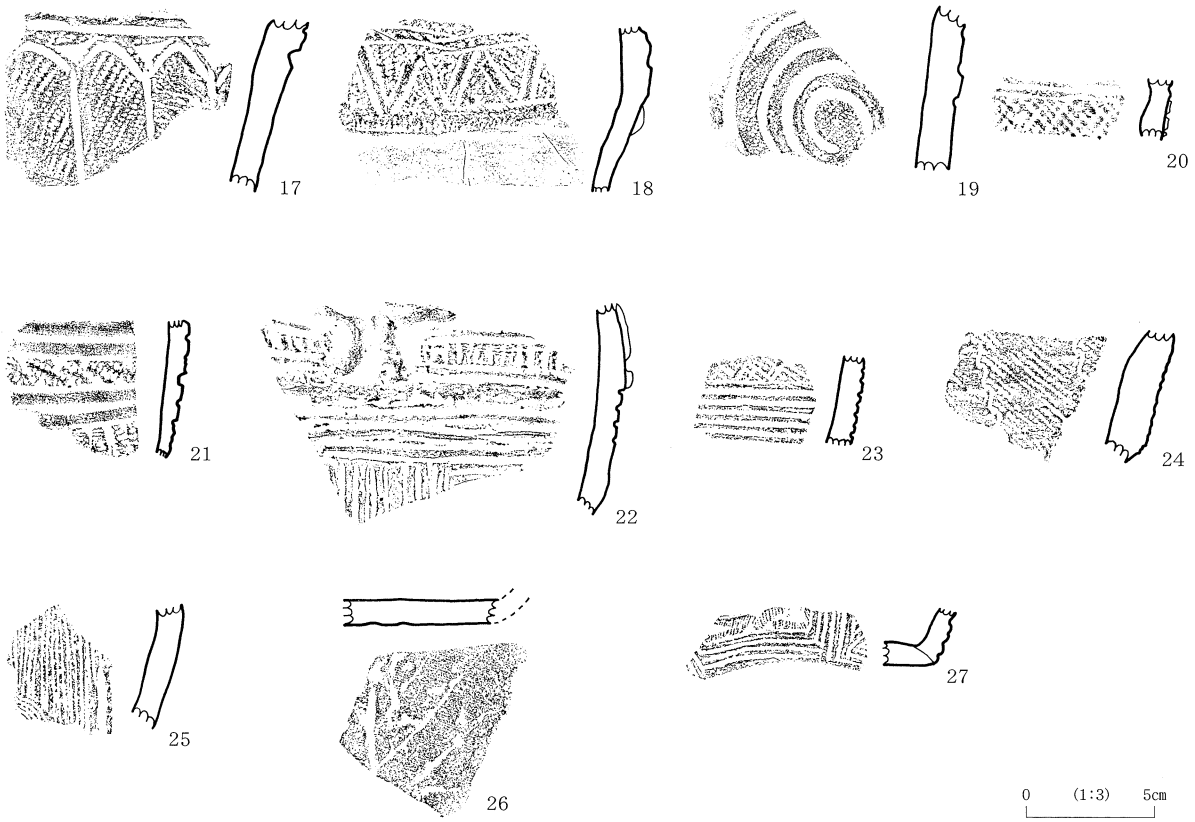
第19図　遺構外出土石器実測図（1）



第20図　遺構外出土土器実測図（２）



第21図　遺構外出土土器拓影図（１）



第22図　遺構外出土土器拓影図（2）

No.	検出箇所	種別	器種	法量			残存度	成形	調整	特徴（文様）	色調	胎土	焼成	備考
				口径	底形	器高								
1	1号住	須恵器	高台付坏	—	8.9	(1.2)	35	ロクロ	内面－ロクロナデ 外面－底部回転ヘラケズリ	ロクロ成形。	2.5Y6/2 (灰黄色)	長石含む	良好	底部のみ
2	2号住	須恵器	坏	(13.8)	—	4.5	45	ロクロ	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ		7.5Y6/2 (灰オリーブ色)	砂粒含む	不良	
3		土師器	坏	(10.1)	(4.2)	5.9	50		内面－ナデ 外面－ナデ	体部・口縁部は内湾。 丸底。	2.5YR5/6 (明赤褐色)	長石・雲母・砂粒・石英含む	良好	底部に「×」刻みあり
4		土師器	坏	12.0	2.9	5	60		内面－ナデ 外面－ナデ	丸底。	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	砂粒・石英含む	良好	外面に炭化物付着
5		土師器	坏	12.1	2.4	5.2	70		内面－ナデ 外面－ナデ	口縁部は直線的に立ち上がる。丸底。	7.5YR4/3 (褐色)	長石・雲母・砂粒・石英含む	良好	内外面に炭化物付着
6		土師器	坏	10.7	3.1	5.6	60		内面－ナデ 外面－ナデ (底部ヘラナデ)	体部は内湾。丸底。	7.5YR6/4 (にぶい橙色)	雲母・砂粒・石英含む	良好	外面に炭化物付着
7		土師器	坏	11.8	5.3	4.9	80		内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ (底部ヘラナデ)	体部・口縁部は内湾。 丸底。	5YR4/4 (にぶい赤褐色)	長石・雲母・石英含む	良好	底部・内面に炭化物付着
8		土師器	坏	11.0	4.2	5.5	95		内面－ナデ 外面－ナデ	体部・口縁部は内湾。 丸底。	2.5YR5/3 (赤褐色)	雲母・砂粒・石英含む	良好	内外面に炭化物付着
9		土師器	坏	12.0	3.4	5.1	70		内面－ナデ 外面－ナデ	丸底。	10YR5/4 (にぶい黄褐色)	雲母・砂粒・石英含む	良好	内外面に炭化物付着
10		土師器	坏	11.0	4.0	5.1	90		内面－ナデ 外面－ナデ	丸底。	10YR5/4 (にぶい黄褐色)	雲母・砂粒含む	良好	底部・内面に炭化物付着
11		土師器	坏	12.0	3.7	4.1	70		内面－ナデ 外面－ナデ (底部ヘラケズリ)	丸底。	10YR4/2 (灰黄褐色)	砂粒含む	良好	底部・内面に炭化物付着
12		土師器	坏	11.75	3.3	5.2	60		内面－ヘラケズリ 外面－ヘラミガキ後ナデ	丸底。	10YR5/4 (にぶい黄褐色)	雲母・石英含む	良好	
13		土師器	坏	〈11.3〉	6.5	4.8	40		内面－ヘラナデ 外面－ヘラナデ	口縁部は内湾。丸底。	10YR6/4 (にぶい黄橙色)	長石・雲母・砂粒・石英含む	良好	内外面に炭化物付着
14		土師器	坏	12.3	5.2	5.3	60		内面－不明 外面－ナデ (底部ヘラケズリ)	口縁部は内湾。丸底。	7.5YR7/4 (にぶい橙色)	長石・雲母・砂粒・石英・小礫含む	良好	
15		土師器	坏	11.45	1.7	6	98		内面－ナデ 外面－ナデ	口縁部は内湾。丸底。	7.5YR7/6 (橙色)	長石・雲母・砂粒・石英・小礫含む	良好	
16		土師器	坏	11.8	4.9	4.9	97		内面－ナデ 外面－ナデ	口縁部は内湾。	5YR5/6 (明赤褐色)	雲母・石英含む	良好	内外面に炭化物付着
17		土師器	坏	13.4	4.3	6.2	95		内面－ヘラミガキ 外面－ヘラミガキ	口縁部は短く外反する。体部は内湾。丸底。	10YR6/6 (明黄褐色)	長石・雲母・砂粒・石英・小礫含む	良好	
18		土師器	坏	11.7	4.65	7.3	70		内面－ヘラミガキ 外面－ヘラミガキ	口縁部は短く外反する。体部は内湾。	2.5YR5/6 (明赤褐色)	長石・石英含む	良好	
19		土師器	坏	12.2	1.6	6.75	99		内面－ヘラミガキ 外面－ヘラミガキ後ナデ	口縁部は短く外反する。丸底。	7.5YR5/8 (明褐色)	雲母・砂粒・石英含む	良好	
20		土師器	高坏	〈9.8〉	8.8	9.25	70		内面－ヘラミガキ 外面－ヘラミガキ	口縁部は直線的に立ち上がる。柱状部は円錐状に下降し、ラッパ状に広がる	7.5YR7/6 (橙色)	長石・砂粒・石英・小礫含む	良好	
21		土師器	高坏	11.2	(5.2)	8.2	70	輪積み	内面－ナデ 外面－ナデ後ヘラミガキ	柱状部は円錐状に下降し、ラッパ状に広がる。	10YR6/6 (明黄褐色)	雲母・砂粒・石英含む	良好	脚部欠損
22		土師器	高坏	—	10.0	5.0	35	輪積み	内面－ヨコナデ 外面－ヘラミガキ	柱状部は円錐状に下降し、ラッパ状に広がる。	10YR6/4 (にぶい黄橙色)	長石・雲母・砂粒・石英・小礫含む	良好	坏部欠損
23		土師器	ミニチュア土器	3.3	2.6	3.8	99	手捏ね	内面－指圧痕 外面－指圧痕		10YR5/6 (黄褐色)	雲母・砂粒・石英含む	良好	
24		土師器	ミニチュア土器	4.5	3.5	4.5	90	手捏ね	内面－指圧痕 外面－指圧痕		2.5Y6/4 (にぶい黄褐色)	雲母・石英・小礫含む	良好	
25		土師器	ミニチュア土器	7.2	3.5	5.1	97		内面－ナデ 外面－ナデ	口縁部は短く外反。	7.5YR6/6 (橙色)	雲母含む	良好	
26		土師器	小型壺	9.7	3.1	10.8	80	輪積み	内面－ヘラミガキ、ナデ 外面－ヘラミガキ、ナデ	口縁部は直線的に外開。 丸底。	5YR5/3 (にぶい赤褐色)	長石・雲母・砂粒・石英含む	良好	
27		土師器	小型甕	11.3	4.6	11.2	80		内面－ナデ 外面－ナデ	口縁部は短く外反。 胴部は緩やかに膨らむ。	2.5YR4/6 (赤褐色)	雲母・砂粒・石英・小礫含む	良好	内外面に炭化物付着
28		土師器	甕	—	5.9	(9.3)	40	輪積み	内面－ナデ後ヘラミガキ 外面－ナデ	胴部は球形状に膨らむ。	10YR5/3 (にぶい黄褐色)	砂粒・石英・小礫含む	良好	内外面に炭化物付着
29		土師器	甕	19.3	3.6	15.4	98		内面－ナデ後ヘラミガキ 外面－ナデ後ヘラミガキ	口縁部は短く外反。胴部は球形状に膨らむ。丸底。	2.5YR4/6 (赤褐色)	雲母・砂粒含む	良好	内面に炭化物付着
30		土師器	甕	18.0	—	(7.0)	20	輪積み	内面－ナデ 外面－ナデ	口縁部は「く」状に外開。	10YR5/4 (にぶい黄褐色)	雲母・砂粒・石英・小礫含む	良好	内外面に炭化物付着
31		土師器	甕	(18.9)	6.9	17.6	70	輪積み	内面－ヘラケズリ 外面－ヘラミガキ	口縁部は短く外開。	2.5YR4/6 (赤褐色)	長石・雲母・砂粒・石英・小礫含む	良好	外面に炭化物付着
32		土師器	甕	18.4	—	(24.8)	30	輪積み	内面－ヘラケズリ 外面－ヘラケズリ	口縁部は短く外開。	10Y4/4 (赤褐色)	雲母・石英・小礫含む	良好	内外面に炭化物付着
33		土師器	甑	〈20.3〉	7.7	17.4	50	輪積み	内面－ナデ後ヘラケズリ 外面－ナデ後ヘラケズリ		5YR5/6 (明赤褐色)	雲母・石英・小礫含む	良好	内外面に炭化物付着
34		土師器	壺	20.4	7.3	36.2	80	輪積み	内面－ヘラミガキ 外面－ヘラミガキ	胴部は球形状に膨らむ。	10YR7/6 (明黄褐色)	長石・雲母・砂粒・石英・小礫含む	良好	内外面に炭化物付着
35	13号土坑	縄文土器	深鉢	〈23.8〉	—	(20.7)	30	輪積み	内面－ナデ	2単位の波状口縁。口縁から頸部は押引文と沈線を施す。	7.5YR4/3 (褐色)	長石・雲母・石英含む	良好	底部欠損
36		縄文土器	深鉢	(24.5)	—	(17.1)	40	輪積み	内面－ナデ	口縁と頸部は押引文と沈線を施し、胴部は縄文を施文。	7.5YR4/4 (褐色)	長石・雲母・石英含む	良好	底部欠損
37	18号土坑	縄文土器	深鉢	〈27.8〉	—	(20.9)	45	輪積み	内面－ナデ	4単位の波状口縁か？地文は縄文で、弧状Y字沈線を施文。	5YR5/4 (にぶい黄褐色)	長石・雲母・砂粒・石英含む	良好	底部欠損
38		縄文土器	深鉢	—	7.5	(5.1)	10	輪積み		斜格子の細隆帯を横沈線で区画。底部は縦沈線で施文。	5YR5/6 (褐色)	長石・雲母含む	良好	底部のみ
39	21号土坑	縄文土器	深鉢	—	7.0	(3.3)	10	輪積み		垂下する隆帯を貼付し、その両脇を沈線で施文。	7.5YR4/4 (褐色)	長石・雲母含む	良好	底部のみ
40	遺構外	縄文土器	深鉢	(35.4)	—	(32.0)	45	輪積み		地文は縄文。口縁部は縦沈線。頸部は平行横沈線。	10YR7/4 (にぶい黄褐色)	長石・雲母・石英・小礫含む	良好	平出ⅢA系
41		縄文土器	深鉢	(28.0)	—	(24.3)	40	輪積み		波状口縁で4単位。地文は縄文。胴部は隆帯と沈線を施す。	7.5YR5/4 (にぶい褐色)	長石・雲母・砂粒・石英含む	良好	

第４表　出土土器観察表

法量：長さ、厚さ、幅（cm）重さ（g）

No.	検出箇所	器　種	材　質	長さ	幅	厚さ	重さ	備　　考
1	2号住	臼　玉	滑石	0.8	0.5	—	0.3	

第5表　出土石製品観察表

法量：長さ、幅、厚さ（cm）重さ（g）

No.	検出箇所	器　種	法量				色　調	胎　土	焼成	備　　考
			長さ	幅	厚さ	重さ				
1	2号住	土鈴	7.0	5.8	—	153	10YR5/4（にぶい黄褐色）	長石・雲母・砂粒含む	良好	手捏ね
2		土鈴	5.1	4.6	—	92	10YR4/3（にぶい黄褐色）	長石・雲母・砂粒含む	良好	手捏ね
3		紡錘車	頂部径 3.5	基部径 4.4	2.5	64	2.5Y5/4（黄褐色）	雲母・砂粒含む	良好	側面- ヘラナデ
4		土玉	1.0	1.4	—	2	10YR5/4（にぶい黄褐色）	長石・雲母・砂粒含む	良好	
5		土玉	1.0	1.3	—	1	10YR5/6（黄褐色）	雲母・砂粒・石英含む	良好	
6		土玉	1.7	1.6	—	4	7.5YR4/3（褐色）	雲母含む	良好	
7	9号土坑	土偶	—	(2.6)	—	(9)	5YR3/6（暗褐色）	長石・雲母含む	良好	腕部のみ、縄文施文
8	10号土坑	土偶	(3.6)	—	—	(10)	5YR4/8（赤褐色）	長石・雲母含む	良好	腕部のみ
9	13号土坑	土偶	(2.9)	—	—	(25)	7.5YR5/6（明褐色）	長石・雲母・砂粒含む	良好	脚部のみ
10	18号土坑	土偶	6.8	3.2	1.5	33	7.5YR4/4（褐色）	雲母・雲母・砂粒・石英含む	良好	板状土偶か？
11	遺構外	土製円盤	3.3	3.5	0.9	10	2.5YR3/6（暗赤褐色）	長石・雲母含む	普通	綾杉文
12		土製円盤	4.2	4.2	1.5	29	5YR3/6（暗赤褐色）	長石・雲母多く含む	普通	貼付文
13		土製円盤	3.1	3.3	0.8	11	5YR5/6（明赤褐色）		良好	縄文、ソーメン状隆帯
14		土製円盤	4.2	4.4	1.1	21	5YR4/6（赤褐色）	長石・雲母多く含む	普通	縄文、沈線
15		土製円盤	4.1	4.0	1.0	16	5YR4/8（赤褐色）	長石・雲母多量に含む	普通	縄文、格子沈線
16		土製円盤	3.1	3.5	1.1	12	2.5YR3/6（暗赤褐色）	長石・雲母含む	普通	平行沈線
17		土偶	(2.8)	—	—	(13)	7.5YR5/6（明褐色）	長石・雲母・砂粒含む	良好	頭部のみ
18		土偶	(4.0)	—	—	(22)	2.5Y4/8（赤褐色）	長石・雲母・石英含む	良好	臀部のみ、内部中実、有脚尻張り立像
19		土偶	(5.7)	—	—	(88)	7.5YR4/4（褐色）	長石・砂粒・石英含む	良好	臀部のみ、内部中実、有脚尻張り立像
20		土偶	(4.1)	—	—	(21)	7.5YR5/6（明褐色）	長石・雲母含む	良好	脚部のみ、有脚尻張り立像？
21		土偶	(3.4)	—	—	(30)	7.5YR5/8（明褐色）	長石・雲母・砂粒含む	良好	内部中実、有脚尻張り立像

第6表　出土土製品観察表

（法量cm・g）

No.	検出箇所	器　種	材　質	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	備　　考
1	1号住	敲・磨石	礫岩	(13.2)	(5.2)	(5.2)	(300)	
2	2号住	石錘	黒曜石	(1.4)	(0.8)	(0.3)	(0.5)	先端のみ
3		打製石斧	硬砂岩	11.3	4.5	1.4	101	撥形　完形
4		打製石斧	泥岩	10.9	4.0	1.5	86	短冊形　完形　風化が激しい
5		凹石	花崗岩	9.1	7.5	5.0	441	完形
6		敲・磨石	砂岩	(9.1)	(5.7)	(4.4)	(390)	
7	10号土坑	石匙	黒曜石	6.5	2.3	0.8	10	完形
8		打製石斧	緑泥岩	(7.5)	(4.8)	(1.9)	(90)	短冊形
9	14号土坑	石鏃	黒曜石	(1.8)	(1.4)	(0.4)	(0.6)	無茎凹基
10	18号土坑	打製石斧	粘板岩	(6.1)	(3.0)	(1.2)	(25)	ミニチュア
11	22号土坑	打製石斧	頁岩	24.0	4.0	1.7	115	撥形　完形
12	遺構外	石鏃	黒曜石	19.5	0.9	0.3	0.4	無茎凹基　完形
13		石鏃	黒曜石	(1.3)	(1.3)	(0.4)	(0.25)	無茎凹基
14		石鏃	黒曜石	(1.9)	(1.0)	(0.4)	(0.4)	無茎凹基
15		石鏃	黒曜石	(2.1)	(1.7)	(0.5)	(1.5)	無茎凹基
16		石錘	黒曜石	(4.0)	(1.0)	(0.9)	(1.5)	
17		打製石斧	頁岩	13.7	3.9	1.1	98	短冊形　完形　風化が激しい
18		打製石斧	頁岩	(10.7)	(4.8)	(2.6)	(157)	撥形
19		打製石斧	緑色凝灰岩	12.0	6.1	2.8	349	短冊形　完形　敲き石としても使用
20		打製石斧	緑色片岩	12.3	4.0	2.1	129	短冊形　完形
21		打製石斧	頁岩	(13.5)	(5.7)	(2.0)	(170)	撥形
22		打製石斧	緑泥岩	(7.0)	(5.0)	(1.4)	(82)	撥形
23		打製石斧	砂岩	(8.4)	(4.3)	(1.95)	(9.9)	短冊形
24		打製石斧	緑泥岩	11.9	4.6	1.5	90	撥形　完形
25		打製石斧	硬砂岩	11.5	5.3	1.6	115	撥形　完形
26		打製石斧	緑泥岩	12.2	5.2	1.5	101	撥形　完形
27		局部磨製石斧	緑色凝灰岩	13.8	4.2	2.5	193	短冊形　完形　側面に敲痕あり
28		乳棒状磨製石斧	緑色凝灰岩	(11.0)	(3.9)	(3.1)	(212)	打痕後磨き調整が全体に認められる
29		乳棒状磨製石斧	緑色凝灰岩	(10.1)	(4.1)	(2.4)	(160)	
30		乳棒状磨製石斧	緑色凝灰岩	(11.3)	(4.7)	(3.1)	(242)	破損後敲石として再利用している
31		敲石	粘板岩	14.2	6.3	3.5	463	
32		磨石	砂岩	(12.5)	(7.3)	(3.05)	(573)	2ヶ所に凹みがみられる
33		磨石	砂岩	(11.8)	(3.2)	(4.8)	(225)	
34		石皿	安山岩	(9.5)	(7.2)	(4.0)	(332)	
35		尖頭器？	粘板岩	(14.5)	(3.8)	(1.05)	(57)	

第7表　出土石器観察表

第4章　総　　括

今回の発掘調査は、広範囲に及ぶ遺跡の一部という事もあり、遺跡全体の様相を明らかにする事はできなかった。また、不勉強のため、調査及び整理作業について十分なものとは言えず、本報告書の編集においても不十分な点は了承されたい。しかし、１次調査からの結果も踏まえて、遺跡の性格の一端を解明する事ができた事は大きな成果であったと言える。ここでは検出した遺構と出土遺物について若干の所見を付け加え総括としたい。

今回の調査箇所は、天竜川の河岸段丘の突端部にあり、町内でも遺跡が多く存在する箇所に位置している。そのため、既存体育館建設の際に削平、撹乱を受けていたにもかかわらず、遺構としては竪穴住居址２軒、土坑22基、ピット３基が検出され、遺物も大量に出土した。

このうち、１号竪穴住居址はカマドのみの検出であった。しかし、一人では持ち運びが困難な程の大きな芯石が両袖に確認され、カマドが大きい事から、大型の住居址であったのではないかと推測される。土器は高台付坏（底部のみ）や長胴甕が出土し、その特徴から平安時代初期（９世紀頃初め頃）ではないかと思われる。

２号竪穴住居址は南側が撹乱されており、全容は不明ながら、長軸7.96m、短軸6.24mを測る。これを町内で検出された古墳時代後期の竪穴住居址と比較すると、面積が約1.5倍程度ある大きな住居址といえる。カマドは削平されており詳細は不明だが、西に細く延びる煙道を有する。火焼面や芯石があったと思われる穴等から推定すると、長軸２mの大型のカマドとなり、本址の規模の大きさに比例している。また、東壁が切っている６号土坑は、その形状から佐久市樋村遺跡や聖原遺跡で見られるような、カマドの対面にある方形張り出しの入口である可能性も考えられる。更に、東側に一段低い面が検出され、ピットが３基確認された。これらのピットは本址の床面の土が乗った状態で検出され、Ｐ９覆土中から出土した土器（22，24）は、本址床面直上から出土した同型の土器と大きな時間的差異は感じられない。また、東壁付近では焼土が確認された。これらを踏まえて考えると、本址は当初、東壁にカマドがあったが、何らかの理由でこれを壊し、周辺のピットを埋めて床面にし、改めて西壁にカマドを設置した可能性も考えられる。

焼失住居であったため出土遺物は多く、土器では須恵器の坏や土師器の坏、高坏、ミニチュア土器、小型壺、甕、甑、壺等がみられる。土製品では土鈴が２点出土し、土玉、紡錘車も出土した。また、滑石製の臼玉も出土している。出土した坏のほとんどが半球形であり（３～15）、非ロクロ成形、ヘラミガキ調整であった。このような坏が多量に出土するのは７世紀始めに多く、高坏（20～22）も同時期のものと推測される。しかし、口縁が短く外反する坏（17～19）や小型壺（26）、須恵器の坏（２）、土玉（４）～（６）、臼玉〈１〉は６世紀初頭頃の様相を呈していると思われ、出土遺物の中で時間的差異がみられる。町内では古墳後期の住居址が確認された例はまだ少なく、現段階では本住居址の時期を断定するのは難しい。このため、本住居址の時期は古墳時代後期（箕輪遺跡より後）とし、今後同時期の住居址出土例が増加した段階で再検討をしていきたい。また、土鈴が１軒の住居址から２個出土する事は大変珍しく、ミニチュア土器や玉類も出土している事から、本住居址は祭祀的性格をもった遺構であ

ると考えられる。

同時代の遺構は、本遺跡では初めての確認であり、本調査地より一段低い面に位置する仲町遺跡で見つかった、ほぼ同時期の竪穴住居址とあわせ、町内の古墳時代後期を知る上での貴重な資料となった。

土坑は22基検出され、その内７基から縄文時代中期初頭と思われる土器片が出土した。本調査地の東側（現プール付近）を調査した２次調査の際、縄文時代中期初頭の竪穴住居址が１軒検出されており、これらの土坑もこれとほぼ同時期の遺構であると推測される。特筆すべきは18号土坑で、覆土中から板状土偶と思われる土製品（10）が出土した。手足は省略され、頭部と胴体が形どられ、顔に当たる部分に小さな窪みを施しただけの古拙的な省略形土偶ではないかと思われる。本土抗から出土した土器片の多くは、縄文時代中期初頭のものであるが、底部のみ出土した深鉢（38）は、縄文時代前期末の様相を呈しており、他の出土土器と時間的差異がみられる。これは、本土坑が重複しているためではないかと思われる。この深鉢（38）と、板状土偶と思われる土製品（10）の胎土が類似しており、この土製品が縄文時代前期末の板状土偶である可能性が考えられる。

遺構外出土土器は、縄文時代中期のものが圧倒的に多く、特に初頭のものが多い。これらは遺構に伴うものではなく、遺物包含層（Ⅰ層）から出土しており、出土量も多い。既存体育館建設前、もしくはそれ以前の水田圃場整備前には、多くの遺構・遺物があったものと思われる。特筆すべきものとしては土偶があげられる。各個体は破壊されており、それぞれの全体像は明らかではないが、左臀部のみ出土した土偶（19）は、極端に臀部が出張った「有脚尻張り立像」と思われる。脚部は残存しないが、その痕跡から安定して太いものと思われる。現存する臀部から推測すると、全体像は15cm 前後の大きな土偶であったものと考えられる。こうした土偶は、縄文時代中期中葉以降多く見られ、特に伊那谷で盛んに作られたものであるが、この土偶はもう少し古い時代のものかもしれない。また、頭部のみ出土した土偶（17）は、頭部が扁平な、いわゆる「河童型土偶」で、縄文中期初頭のものと思われる。これは２次調査の際に出土した土偶の頭部と類似している。その他にも脚部と腕部が出土しており、これまでの調査同様、遺構外での出土例が多い。また、２次調査でも出土した土製円盤も出土している。

今回の調査では、これまで古墳時代の遺跡として認識していなかった本遺跡において、古墳時代の遺構・遺物が確認できた事は、大きな成果であった。当町では、中山遺跡がある段丘上に多くの遺跡が存在するが、遺跡分布調査の結果、古墳時代の遺跡に限ると、本遺跡より一段低い段丘上に多く遺跡が存在すると推測されている。例えば、本遺跡の段丘下（東側）にある仲町遺跡では、古墳時代後期の竪穴住居址が４軒確認されている。また、東淵には、仲町古墳（６世紀前半～中頃）があった。さらに同段丘上には、東町遺跡、旭町遺跡、南町遺跡等古墳時代の遺物が採集されている遺跡がある。これは、この付近でいくつかの集落が存在していた可能性を示唆している。また、これより南に位置する箕輪遺跡では、今回の調査で検出された竪穴住居址より古い時期の竪穴住居址が８軒と、水田跡が確認されている。今回中山遺跡で確認された古墳時代の竪穴住居址は１軒のみで、この住居址が一段下の集落とどのような関係性を持っているのかは不明である。しかし、一段高い段丘上で大きな住居址が確認された事は興味深く、今後、本遺跡や同じ段丘上で同時期の住居址が確認されれば、関係性が明らかになってくるかもしれない。

更に、当遺跡と同じ段丘の北側には松島王墓古墳（６世紀中頃～後半）が存在する。上伊那唯一の前方後円墳である松島王墓古墳は、未調査であり詳細は不明ながら、埴輪や墳丘形態の特徴から、築造時

期を6世紀前半とする見解もある。これらの集落と松島王墓古墳の関連性はもちろん不明であるが、今後、松島王墓古墳の解明にあたって、本遺跡及び周辺の古墳時代の遺跡が重要な役割を果たす事は間違いないのではないだろうか。

以上、これまでの調査の成果も踏まえながら各遺構・遺物に対する推測と、今後展開すべき課題を述べてきた。これによって本遺跡は、縄文時代から平安時代まで、長期に渡って人々が生活の場として利用してきた地である事が明らかになり、箕輪町の歴史を考える上でも重要な遺跡である事は間違いない。しかし、今回調査した箇所は遺跡の一部であり、全容を解明するためには更なる調査が必要と思われる。

本書の末筆にあたり、調査の成果が郷土の歴史と文化を解明する上で有意義に活用され、より多くの人に文化財保護にご理解いただければ幸いである。調査の進行と本書の作成にあたり、ご支援ご協力をいただいた箕輪中学校関係者の皆様、工事関係者の皆様、暑い中作業にあたって頂いた作業員の皆様、そして調査にご協力いただいた全ての方々に厚く御礼申し上げます。

参考・引用文献（著者名50音順）

小林達夫編　1988『縄文土器大観２　中期Ⅰ』　小学館

鈴木道之助　1981『図録　石器の基礎知識Ⅲ　縄文』　柏書房

鳥居龍蔵　1926『先史及原始時代の上伊那』

北條芳隆　1993『松島王墓古墳の埴輪』
「伊那路」第37巻11号　上伊那郷土研究会

佐久市教育委員会　2004『聖原　第３分冊』

長野県教育委員会　1974『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
－上伊那郡箕輪町－

長野県史刊行会　1988『長野県史』考古資料編　全１巻（４）遺構・遺物編

長野県埋蔵文化財センター　2005『箕輪遺跡』－箕輪町内－

箕輪町誌編纂刊行委員会　1976『箕輪町誌』第１巻　自然・現代編

箕輪町誌編纂刊行委員会　1986『箕輪町誌』第２巻　歴史編

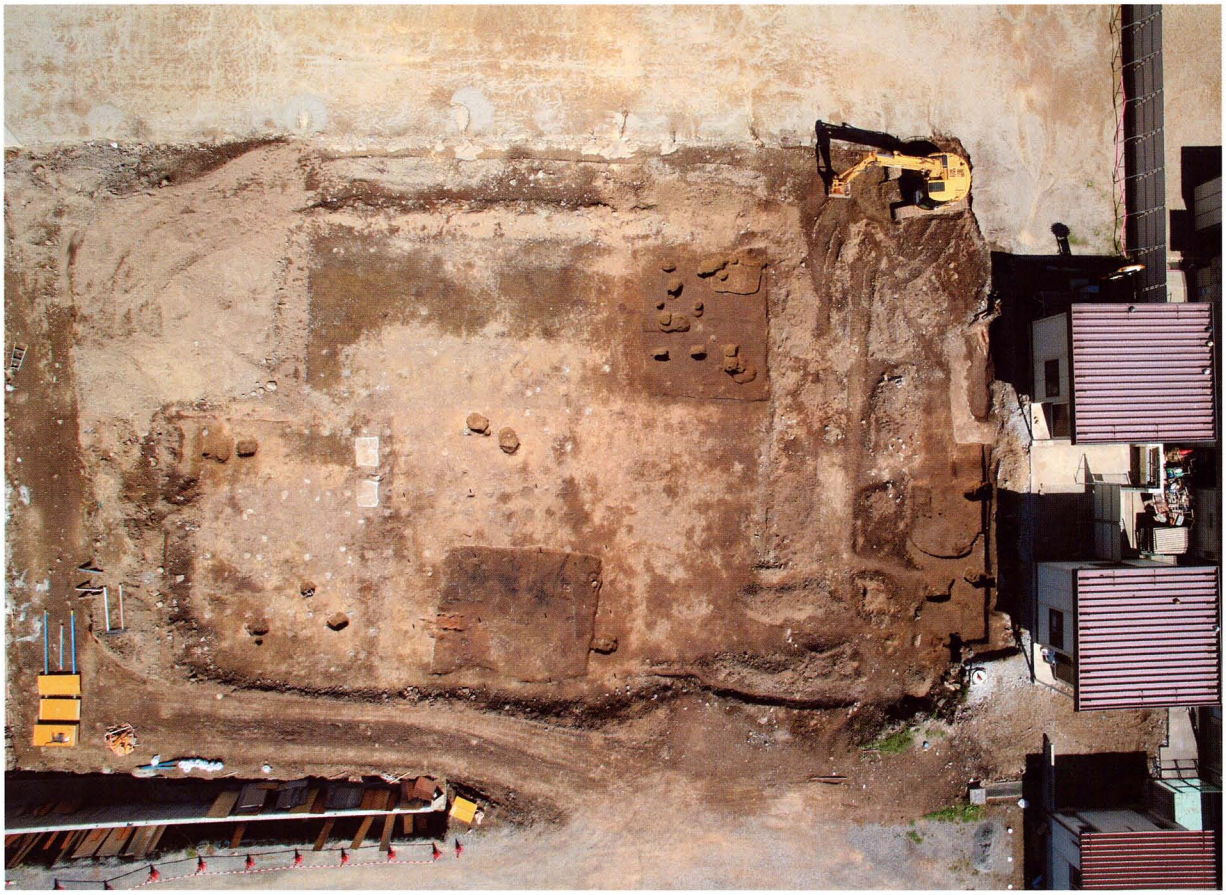
箕輪町教育委員会　1985『中山遺跡』

箕輪町教育委員会　1987『中山遺跡』（第２次）

箕輪町教育委員会　1988『中山遺跡』（第３次）

箕輪町教育委員会　1998『仲町遺跡』

箕輪町教育委員会　1997『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』



全体図

作業風景

1号竪穴住居址カマド南北断面（西から）

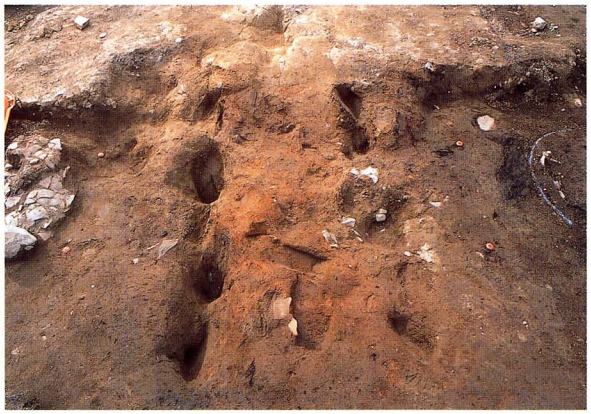
1号竪穴住居址カマド東西断面（南から）

1号竪穴住居址カマド（南から）

2号竪穴住居址（東から）

2号竪穴住居址カマド東西断面（南東から）

2号竪穴住居址カマド（東から）

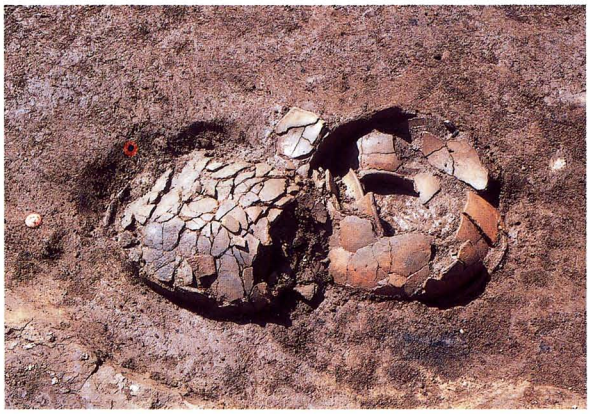


2号竪穴住居址カマド全掘（東から）

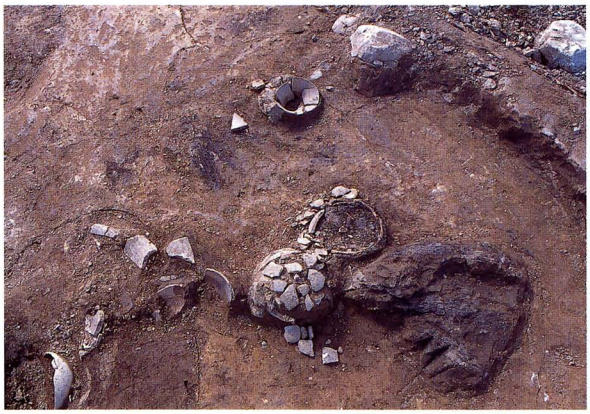
2号竪穴住居址Ｐ１遺物出土状況

2号竪穴住居址Ｐ２（南から）

2号竪穴住居址Ｐ７、８、９（東から）



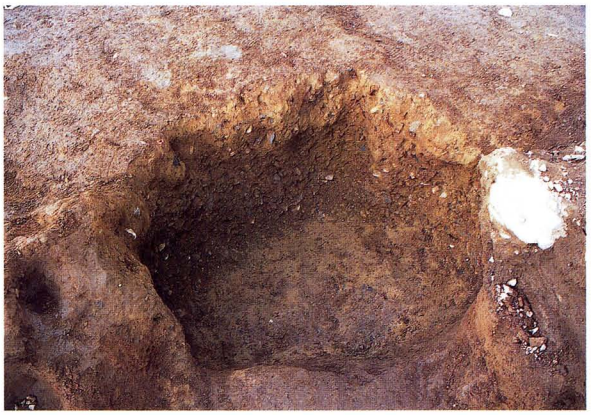
2号竪穴住居址　遺物出土状況①



2号竪穴住居址　遺物出土状況②

2号竪穴住居址　土鈴出土状況

2号竪穴住居址　編物石出土状況

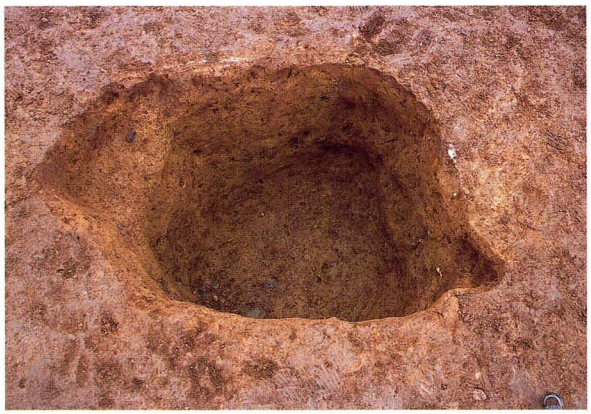


7号土坑（南から）

13号土坑　遺物出土状況（南から）

14号土坑（南から）

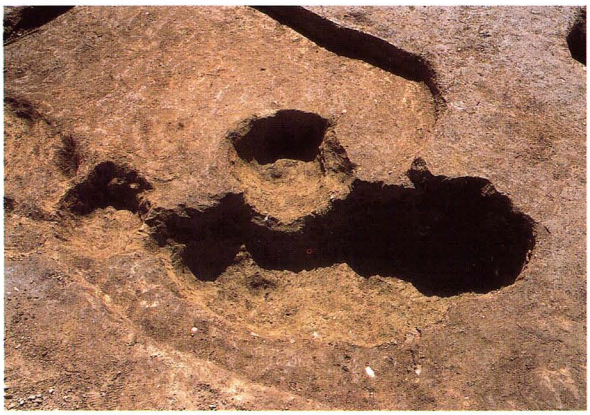
16号土坑（東から）



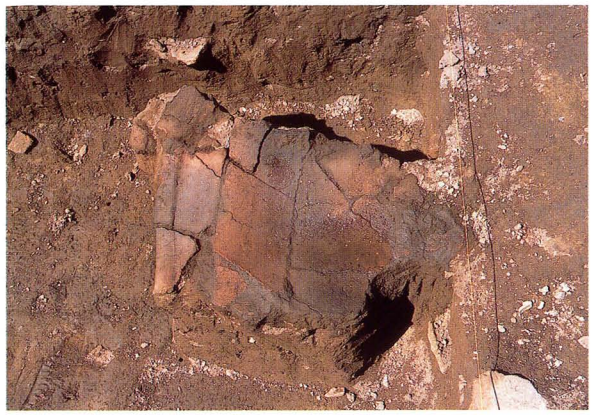
17号土坑（南から）

18号土坑（東から）

20号土坑（東から）

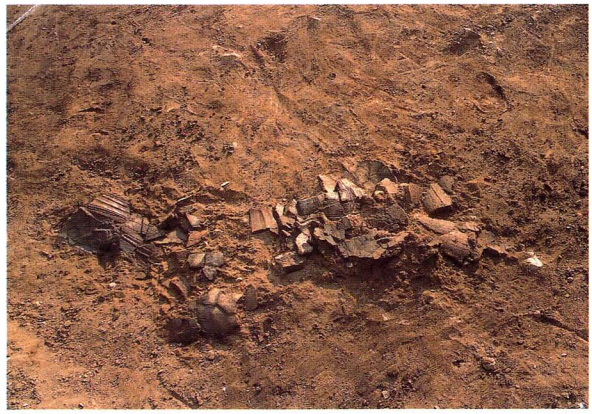


ピット３、21号土坑（北から）

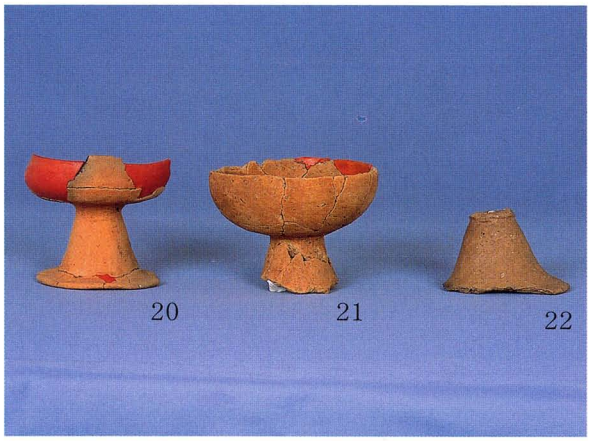


１区　遺物出土状況①

１区　遺物出土状況②



２区　遺物出土状況

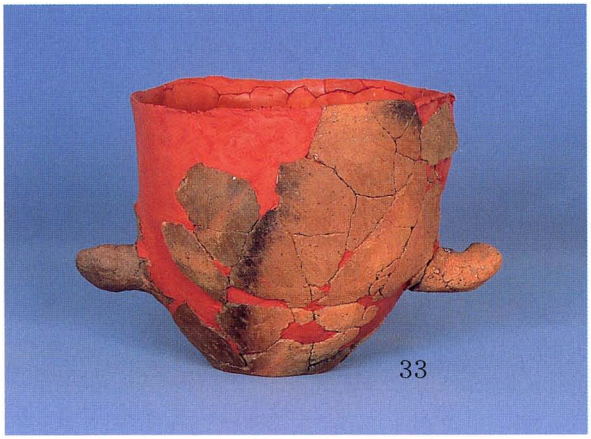

20
21
22

23
24
25

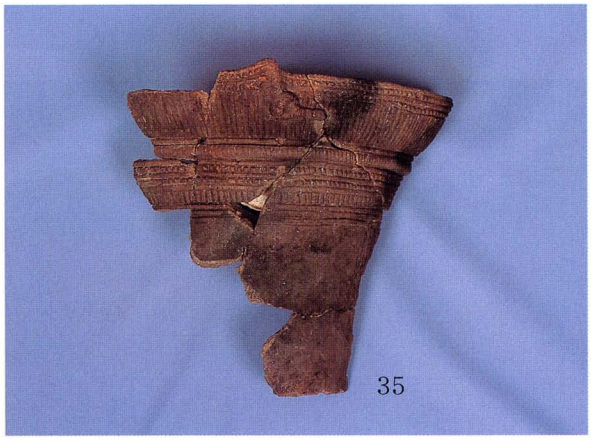
26
27

29
31

図版6


33

34

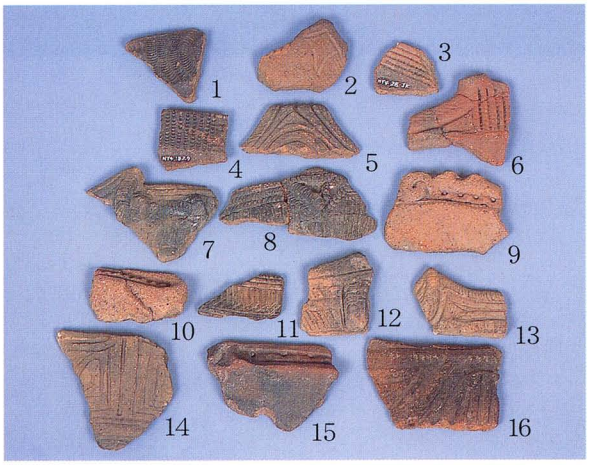

35

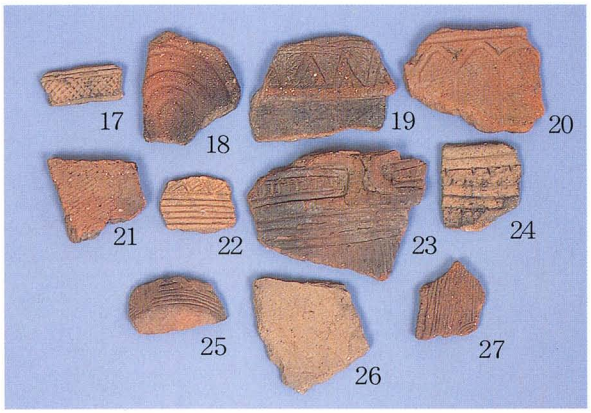
37

38

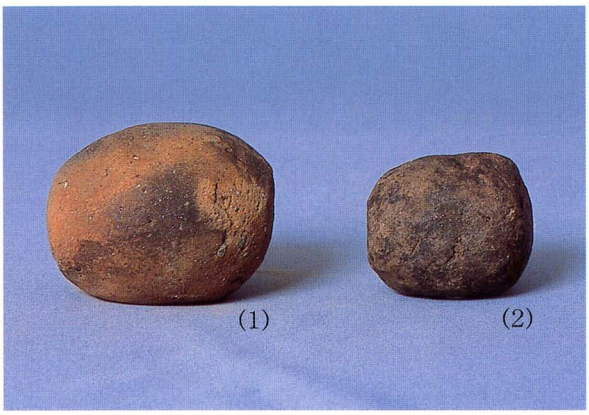
40

41

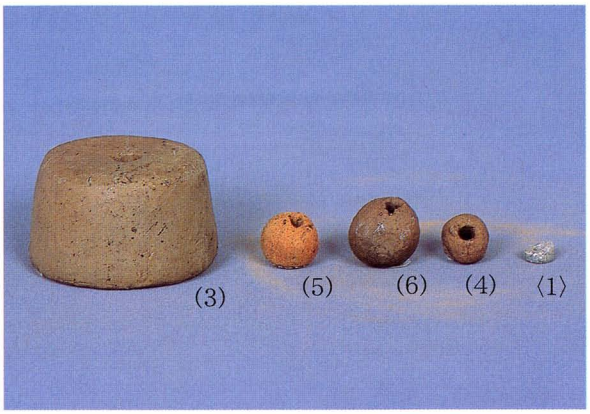




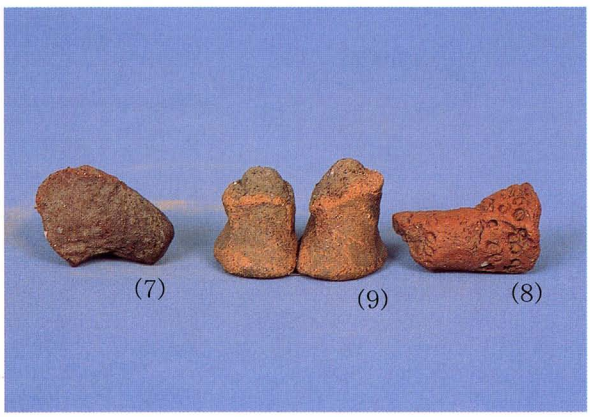
編物石



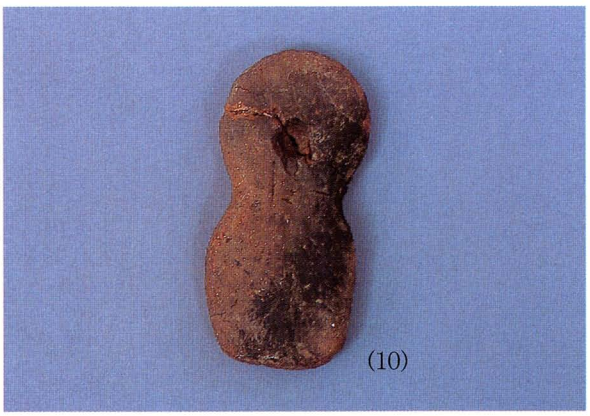
2号竪穴住居址出土　土鈴



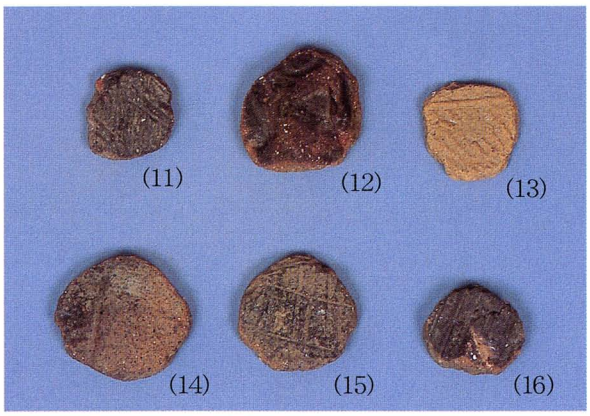
2号竪穴住居址出土　土製品・石製品



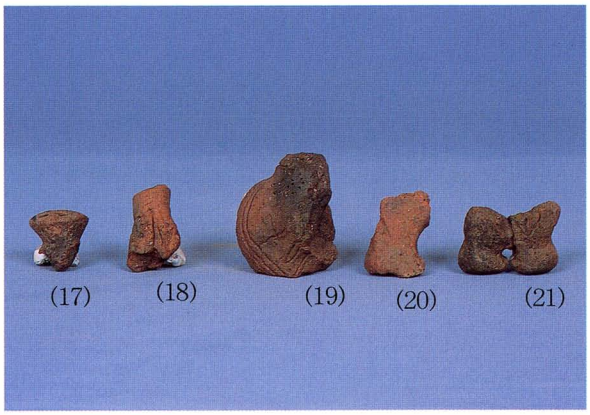
土坑出土　土偶



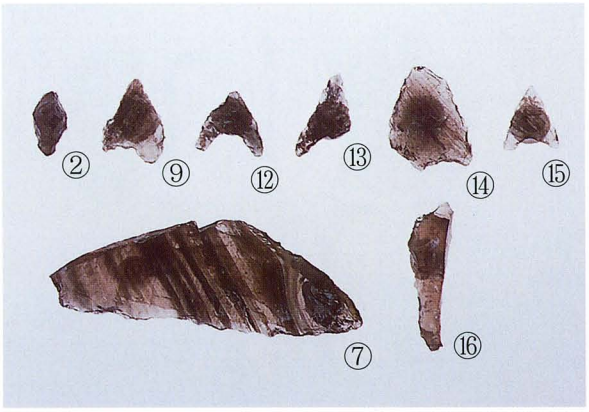
18号土坑出土　土偶



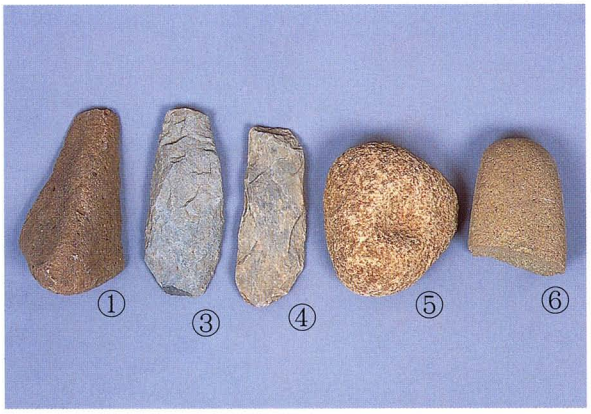
遺構外出土　土製円盤



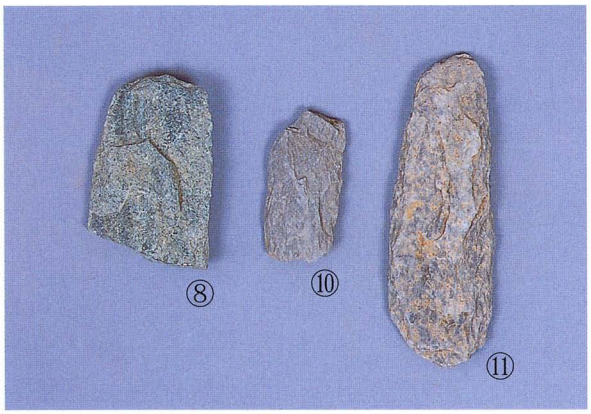
遺構外出土　土偶



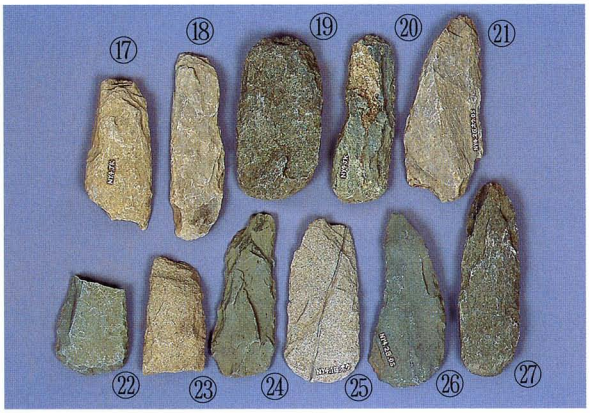
石錘・石鏃・石匙



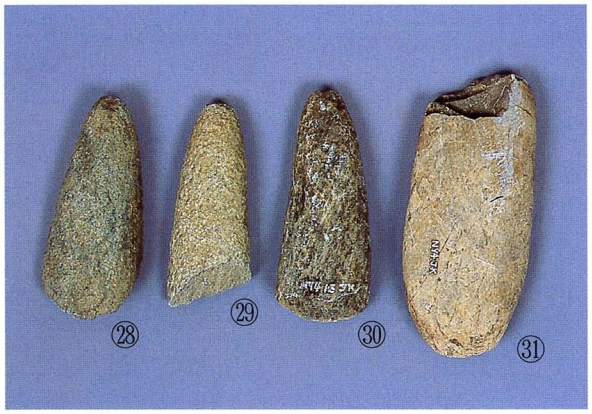
1・2号竪穴住居址出土　石器



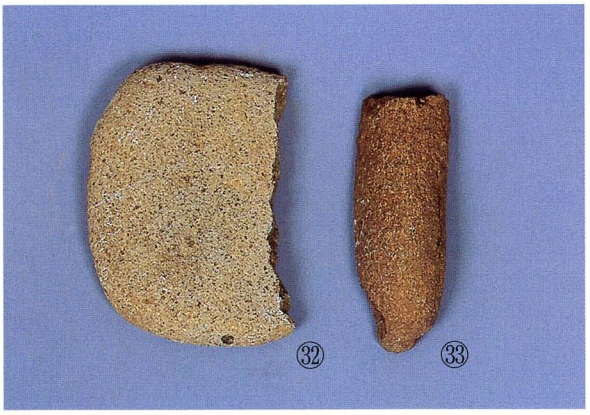
土坑出土　石器



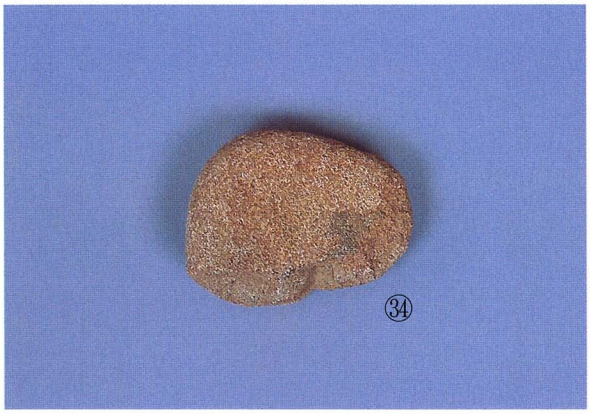
遺構外出土　打製石斧（㉗は局部磨製）



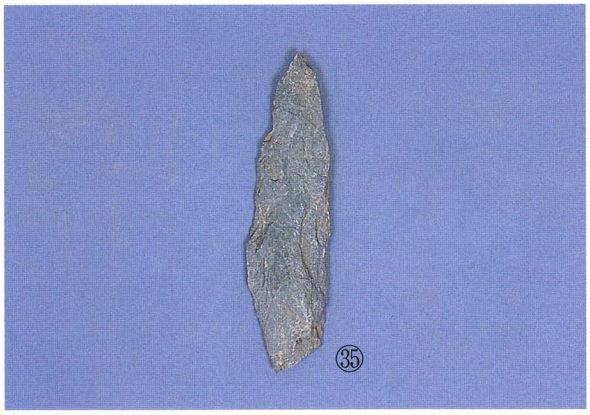
遺構出土　磨製石斧・敲石



遺構外出土　磨石



遺構外出土　石皿



遺構外出土　尖頭器？

報告書抄録

ふりがな	なかやまいせき
書名	中山遺跡
副書名	平成23年箕輪中学校体育館改築事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
著者名	柴　秀毅　　井澤はずき
編集機関	箕輪町教育委員会
所在地	長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪10,291番地　　(代)Tel 0265－79－3111
発行年月日	2013年３月14日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
中山遺跡 (なかやまいせき)	長野県上伊那郡 (ながのけんかみいなぐん) 箕輪町大字 (みのわまちおおあざ) 中箕輪10,251番地1 (なかみのわ) 他	20383	68	35° 54′ 46″	137° 58′ 54″	2012.8.21 ～ 2013.3.14	800	中学校 体育館 改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中山遺跡	集落址	縄文時代 古墳時代 平安時代	住居址　２軒 土坑　22基 ピット　３基	縄文土器、土師器、須恵器、土製品、石器	縄文時代中期初頭の土坑、古墳時代後期の住居址、平安時代前期の住居址

要約	住居址２軒と、土坑22基、ピット３基を検出した。この内２号住居址は焼失住居で、出土遺物から古墳時代後期のものと推測される。また、土坑からは縄文時代中期初頭の遺物が多く出土し、18号土坑からは縄文時代前期末とも推測される板状土偶が出土した。

中 山 遺 跡

平成23年箕輪中学校体育館改築事業に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成25年３月 発 行

編集・発行　長野県上伊那郡箕輪町
教　育　委　員　会

印　　刷　龍 共 印 刷 株 式 会 社